

吉田城址 (VIII)

付載 1 吉田城址本丸鉄櫓下石垣の測量調査

付載 2 吉田城址金柑丸東側堀の立会調査

付載 3 南田遺跡発掘調査



2006年3月

豊橋市教育委員会

よし だ じょう し
吉田城址 (VIII)

付載1 吉田城址くわじやま本丸鉄櫓下石垣の測量調査

付載2 吉田城址きんがんまる金柑丸東側堀の立会調査

付載3 南田遺跡みなた発掘調査

2006年3月

豊橋市教育委員会

例 言

1. 本書は、豊橋市今橋町3（豊橋公園内）において、飲料水兼用耐震性貯水槽設置工事（主管課・豊橋市消防本部防災対策課）に伴い事前に調査した吉田城址23次発掘調査の報告書である。調査期間は平成17年7月25日～8月31日で、調査面積は282㎡である。
また、石垣補強工事（主管課・公園緑地課）に伴う吉田城址本丸鉄槽下石垣の測量調査、園路整備（主管課・公園緑地課）に伴う吉田城址金柑丸東側堀の立会い調査、さらに豊橋市下五井町（下五井地区体育館敷地内）において、飲料水兼用耐震性貯水槽設置工事（主管課・豊橋市消防本部防災対策課）に伴い事前に調査した南田遺跡発掘調査（2次調査）の報告を付載している。
2. 発掘調査は豊橋市教育委員会が行い、岩原 剛（教育部美術博物館）が担当した。また付載分についても岩原が担当している。
3. 本書の作成に際して、工事関係課である豊橋市消防本部防災対策課、豊橋市役所公園緑地課、豊橋市水道局水道工事課をはじめ、地元の方々のご理解・ご協力をいただいた。また資料調査及び報告書の執筆に際して、石垣については加藤理文（織豊期城郭研究会）、高田徹（城郭談話会）、中井均（織豊期城郭研究会）、三浦正幸（広島大学大学院教授）の各氏、出土遺物については藤澤良祐氏（愛知学院大学教授）にご教示をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。
4. 報告書の執筆及び編集、遺構・遺物の写真撮影は岩原が行った。ただし、吉田城址本丸鉄槽下石垣の測量図作成、ならびに航空写真撮影は㈱パスコに委託をして行っている。
5. 調査区に使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標系に沿うものである。なお、吉田城址・南田遺跡発掘調査の基準点の測量は㈱大地コンサルタントに委託をして行っている。
6. 遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地	1
2. 歴史的環境	2
3. 吉田城の歴史と構造	4

第2章 調査の目的と経過

1. 調査にいたる経過	6
2. 調査の方法と経過	7

第3章 遺構

1. 道路遺構	8
2. 掘立柱建物・構	8
3. 溝	12
4. 土塼	13

第4章 遺物

1. 構	19
2. 溝	19
3. 土塼	25
4. 表土	34

第5章 総括

1. 調査区内の遺構変遷	37
2. まとめ	37

付載1 吉田城址本丸鉄櫓下石垣の測量調査	38
----------------------------	----

付載2 吉田城址金柑丸東側堀の立会調査	44
---------------------------	----

付載3 南田遺跡発掘調査	46
--------------------	----

挿 図 目 次

■吉田城址発掘調査

第1図 吉田城址周辺地形図(1/45,000) ……………	1	第2図 周辺道路分布図(1/25,000) ……………	3
第3図 近世吉田城の構造(1/10,000) ……………	5	第4図 調査区位置図(1/2,500) ……………	6
第5図 「吉田藩土屋敷園」上の調査区 ……………	7	第6図 八幡小路・8区SD-1・2土層図(1/80) ……	8
第7図 調査区平面図(1/120) ……………	9	第8図 掘立柱建物・櫓-1(1/80) ……………	11
第9図 櫓-2(1/80) ……………	12	第10図 4区SD-1出土状況(1/20) ……………	14
第11図 土塚-1(1/80) ……………	15	第12図 土塚-2(1/20・1/80) ……………	16
第13図 4区SK-11・12出土状況(1/20) ……………	17	第14図 出土遺物-1(1/3) ……………	20
第15図 出土遺物-2(1/3) ……………	21	第16図 出土遺物-3(1/3) ……………	22
第17図 出土遺物-4(1/3) ……………	23	第18図 出土遺物-5(1/3) ……………	24
第19図 出土遺物-6(1/3) ……………	25	第20図 出土遺物-7(1/3) ……………	26
第21図 出土遺物-8(1/3) ……………	28	第22図 出土遺物-9(1/3) ……………	29
第23図 出土遺物-10(1/3) ……………	30	第24図 出土遺物-11(1/3) ……………	31
第25図 出土遺物-12(1/3) ……………	32	第26図 出土遺物-13(1/3) ……………	33
第27図 出土遺物-14(1/1・1/3) ……………	34		

■吉田城址本丸鉄槽下石垣の測量調査

第28図 鉄槽下石垣の位置(1/3,000) ……………	38	第29図 鉄槽下石垣実測図(1/120) ……………	40
第30図 櫓台の裏込めに使われた石塔等(1/4) ……	42	第31図 石垣の目地(1/240) ……………	43

■吉田城址金柑丸東側堀の立会調査

第32図 金柑丸・三の丸間堀底土層縦断面図(1/40) ……………	45
-----------------------------------	----

■南田遺跡発掘調査

第33図 南田遺跡調査区位置図(1/2,500) ……………	46	第34図 調査区平面図・土層図(1/80) ……………	48
--------------------------------	----	-----------------------------	----

表 目 次

第1表 遺物観察表 ……………	35
-----------------	----

写真図版目次

■吉田城址発掘調査

図版1 調査区北半全景(西から)

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 2-1 道路遺構(北から) | 2 道路遺構の舗装状態(南から) |
| 3-1 1区SD-1 [道路遺構](南から) | 2 4区SD-1出土状況-1(北東から) |
| 4-1 調査区全景(南から) | 2 調査区南半全景(北から) |
| 3 5区SD-1(南から) | 4 4区SD-1出土状況-2(東から) |
| 5 4区SK-11出土状況(南東から) | 6 柱根出土状況(南から) |
| 5 出土遺物-1 | 6 出土遺物-2 |
| 7 出土遺物-3 | 8 出土遺物-4 |
| 9 出土遺物-5 | |

■吉田城址本丸鉄槽下石垣の測量調査

図版10-1 本丸・二の丸の現状-1(北から)

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 11-1 鉄槽下石垣全景-1(北から) | 2 本丸・二の丸の現状-2(北東から) |
| 12-1 北面石垣出隅部上半(北から) | 2 鉄槽下石垣全景-2(西から) |
| 3 北面石垣と武器庫下石垣(北から) | 2 北面石垣出隅部下半(北から) |
| 5 西面石垣中央(西から) | 4 西面石垣出隅部(西から) |
| | 6 西面石垣南端(西から) |

■南田遺跡発掘調査

13 調査区全景(北西から)

- | | |
|-----------------|----------------|
| 14-1 SB-1(北西から) | 2 断ち割り状況(北西から) |
|-----------------|----------------|

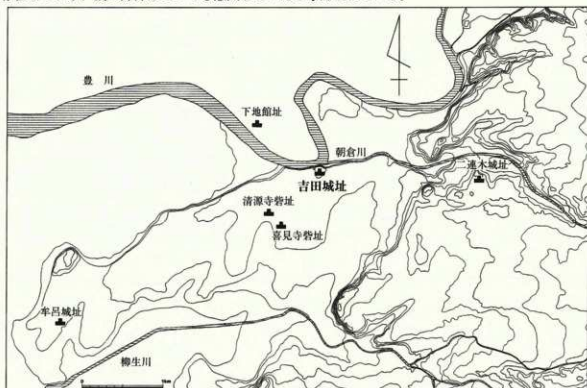
第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 (第1図)

豊橋市域は、東側が弓張山地、南側が太平洋、西側が三河湾、北側が豊川にそれぞれ限られた地である。海、山、川に画された市域は広く、人口380,181人（平成18年3月現在）を数える愛知県東部の中核都市である。

東部の山地や北西部の沖積低地を除くと、市域の多くは豊川と旧天竜川によって形成された河岸段丘上にある。この河岸段丘は、高位面（天伯原面・標高30～60m）、中位面（高師原面～豊橋上位面・標高15～30m）、低位面（豊橋面・標高4～10m）の3面に分けることができ、吉田城址は低位面に立地する。この低位面は比較的平坦であるが、面の連続性からさらにⅠ～Ⅲ面に分けることができる。吉田城址は標高10m前後のⅠ面上にあり、周囲より1～2mほど高い小山状の地形である。ちなみにⅡ面は標高4～8mで低位面の主要部となり、Ⅲ面は吉田城址の南方にある柳生川にそって展開する標高3～5mの部分である。

厳密に言えば、近世吉田城址の全体がⅠ面に立地するわけではなく、本丸を中心とする地域のみが相当する。ここからは南側の城下や東西に連なる東海道、さらには北側に展開する沖積低地を広く望むことができる。本丸の背後は豊川や朝倉川によって浸食された7～8mほどの段丘崖となり、城の防御として利用されていた。なお近世の城城西端を区画する総堀の西側にも落差2mほどの段丘崖が存在しており、城の防御をここでも意識していたと考えられている。



第1図 吉田城址周辺地形図 (1/45,000)

2. 歴史的環境 (第2図)

吉田城址は豊川を北に臨む段丘の端部に立地している。吉田城址から朝倉川をはさんで北東方向に連なる段丘の端部周辺には、縄文時代以降数多くの遺跡が所在し、市内では遺跡の集中地域のひとつである。段丘崖は伏流水が湧出する場所であり、また海浜部から山間部である奥三河を結ぶ、物資流通の大動脈である豊川に面することも、遺跡の立地に大きく影響を与えたと考えられる。また沖積低地では、自然堤防上に縄文時代晩期以降に集落が営まれていた。

縄文時代 石塚貝塚(1)は段丘端の斜面に形成された前期中葉の貝塚で、ハイガイを主体としている。段丘上の集落と推定される眼鏡下池北遺跡では、早期の炉穴ほかが多数検出され、また洗鳥遺跡(2)は、前期～中期の集落遺跡と考えられる。大蚊里貝塚(3)、五貫森貝塚(4)は自然堤防上に立地するヤマトシジミを主体とする晩期の貝塚で、東海地方における晩期土器編年の標識遺跡である。なお、吉田城址でも土器棺と考えられる条痕文土器の深鉢が出土している。

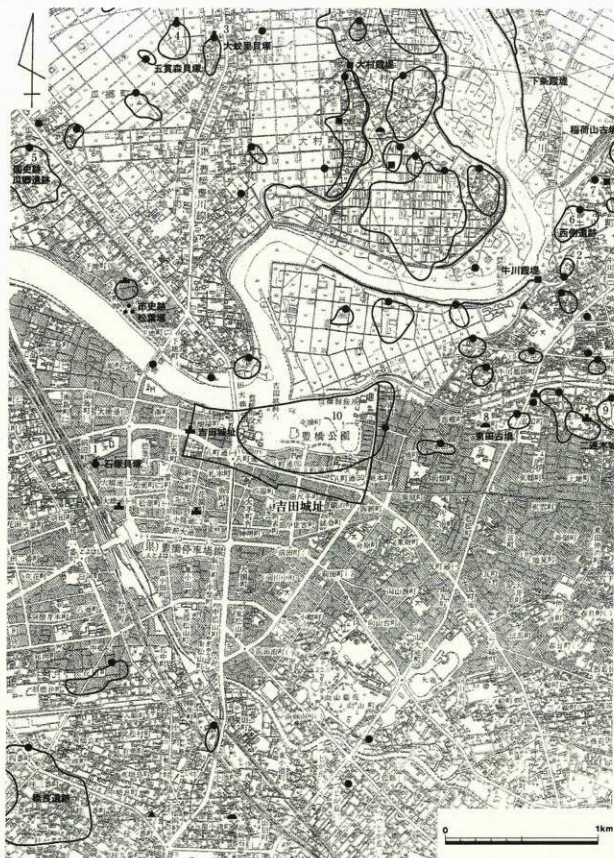
弥生時代 沖積低地の自然堤防上に立地する瓜郷遺跡(5)は、中期の拠点集落であり、土器のほか豊富な木製品、玉類、骨角器などが出土している。一方段丘上の遺跡では、西側遺跡(6)で後期の溝が検出され、寄道式期の多量の土器群が出土したほか、近畿式銅鐻(突線鈕Ⅲ式)の飾耳片が出土している。また同一段丘上にある浪ノ上遺跡も後期を主体とする集落址である。付近の弥生時代後期の遺跡はいずれも規模がさほど大きくは無く、拠点集落である高井遺跡と衛星的な関係を結んでいたと考えられる。

古墳時代 吉田城址の発掘調査で、柳葉式の銅鏃1点が出土しており、付近に前期古墳が存在した可能性が高い。西側北遺跡(7)で確認された方墳は前期に属し、主体部から柳葉系鉄鏃や鉄鋤先などが出土している。牛川・石巻地区の段丘上には、稲荷山古墳群、森岡古墳群、高井古墳群など、前期～中期に属する方墳群が存在しており、豊橋市域の特徴のひとつになっている。首長墓の分布は付近では少ないが、東田古墳(8)は全長40mの前方後円墳で、後円部からは鳥文鏡、大刀が出土したほか、墳丘からは黒斑の埴輪片が採集されており、中期前葉に築造されたと推定される。

一方集落遺跡では、西側遺跡で中期・後期の堅穴住居がまとめて検出されているほか、東田遺跡(9)も後期を主体とする集落址である。

古代 吉田城址と位置がほぼ重複する飽海遺跡(10)は弥生時代の遺跡と言われるが、発掘調査で掘立柱建物を中心に、古代の遺構が集中して検出されている。遺物には墨書土器や緑陶陶器などがあることから、官衛的な性格をもった遺跡が付近に展開していたと推定されており、近年は「渥美郡街址」にも比定されている。

中世 平安時代末以降、付近には伊勢神宮領である飽海神戸、吉田御園が存在したと推定され、発掘調査で検出された集落遺構がこれに比定されている。また、街道の整備、さらには豊川舟運の発達により、中世には付近に港を兼ねた宿が成立していた。15世紀に著された『覽富士記』に現れる「今橋の御とまり(今橋宿)」は、その具体像がまったく明らかではないが、中世の拠点集落として、吉田城の前身・今橋城の成立の背景をになったことは容易に想像される。



第2図 周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)

3. 吉田城の歴史と構造 (第3図)

吉田城の築城 吉田城の築城は、永正2年(1505)にさかのぼり、豊川の一色城主である牧野古白が城地を見定め、「馬見塚の岡」と称したこの地に城を築いたことにはじまる。当初は今橋城と称したが、これは当時この地にあった中世の宿・今橋宿による。

今橋城が築かれたころ、東三河地域は豊川右岸地の台地部を本拠地とした牧野氏、渥美半島の基部である田原を本拠とし、三河湾の制海権を握っていた戸田氏の2大勢力があり、また奥三河には奥平や菅沼といった諸勢力があった。今橋城は牧野・戸田両氏との抗争の最前線に築かれた城であった。

戦国期の吉田城主 今橋築城から享禄2年(1529)にかけて、牧野氏と戸田氏による激しい争奪戦が繰り返され、その間に今橋の地は名を吉田と改められた。争奪戦の対象となったのは、すでに今橋(吉田)城が東三河平野部支配の要の城であり、両勢力の中間地点であることはもちろん、今橋が宿・港町として、東三河経済の中心的位置を占めていたであろうことが要因にあげられる。

その後、西三河の松平、駿河の今川らによる介入を受け、吉田城主は変遷する。今川氏は吉田城を攻略した後、戸田氏を城主としたが、後に直接城代をおいて東三河を直轄的に支配した。

永禄7年(1564)、松平元康は吉田城を攻め、東三河を攻略した。家康は重臣の酒井忠次を吉田城主とし、酒井氏は忠次の子・家次の代まで吉田城主をつとめた。

天正18年(1590)、徳川家康の関東移封に伴い、池田輝政(吉田在城時は照政)が城主となる。輝政は石高15万2千石にふさわしい城とすべく、吉田城を大規模に改変・整備したと言われている。

戦国期吉田城の構造 ところで、輝政が城主となる前の戦国期吉田城の姿はよく分かっていない。ただし、現存する城の縄張りや発掘調査から、その一部を伺うことは可能である(高田2006)。

まず、現状の縄張りを見ると、直線的にめぐらされた総構の堀とは対照的に、三の丸以内の堀は出入りが著しい。これは遺構の設けられた時期差をあらわすと考えられている。総構自体は17世紀代に設けられた可能性があるため、三の丸以内は輝政期以前のものと考えてよいだろう。

とくに三の丸の東北部分は複雑に屈曲し、初期吉田城の構造を反映する可能性がある。また本丸を中心に三の丸西側北部の堀に囲まれた方形の区画、二の丸北西部の方形の区画、金柑丸、そして金柑丸東側の三の丸北東部が、豊川に沿って一直線にならぶ方形の区画群とみなされ、初期の吉田城の基本構造の名残と考えられる。

そうした見解を裏付けるのが、発掘調査の成果である。二の丸北西の区画に相当する第7次調査では、大窯第1段階の堀が検出され、底から大量の廃棄された土師器の皿が出土した。土師器皿は饗宴や儀式など「ハレ」の場で多量に使用され、清浄であるべきものとして一括廃棄される性質を持ち、その大量出土は権力者の存在を示すと考えられている。特に第7次調査区は城内でも貿易陶磁の出土量が多く、付近に今橋城段階の中核があったと考えられる。

また、大窯第1～3段階にかけて、近世の堀とは異なる位置に堀が設けられていたことが判明している。たとえば先にあげた第7次調査の堀のほか、第9次調査では西側に突出部を造り出した小規模な堀が検出されている。この突出部は近世吉田城の二の丸口に隣接し、そこへと通じる道路遺構も確

認されており、酒井忠次期の虎口遺構と推定される。これら埋没した堀は、戦国期吉田城の多様な姿をあらわすものであるが、一方で戦国期の堀に隣接して近世の堀が設けられるなど、その基本構造が踏襲され続けていた部分もあった。

池田輝政が城主であった織豊期に、吉田城は総構を除いた現在の姿に整備されたと考えられている。おそらく、城の利用法を踏襲すべく、前代の縄張りを考慮しながら新たな曲輪が配置され、堀が大規模化し、近世城郭として生まれ変わったのだろう。本丸と北の帯曲輪、二の丸には5基にも及ぶ三重櫓が建てられた豪壮なつくりで、その中心的な櫓である鉄櫓部分に、当時の石垣が遺存している。近世にはすべて三重櫓とされたが、輝政の頃には鉄櫓のところに天守があったのではないかと、との指摘もある（加藤2006）。

近世の吉田城 池田輝政の経路移封後は、3～8万石程度の譜代大名が城主となった。西国の近世城郭に比較して石垣こそ少なかったが、壮大な規模の城であった。従来、総構は池田輝政により設けられたとされたが、先述のように三の丸以内の堀とは形態が大きく異なること、なにより江戸期に整備された東海道と総構の堀が並行し、同時期に整備された可能性が高いことから、総構自体は17世紀前葉に掘削されたと考えられる（高田2006・岩原2006）。総構の内部は家臣の屋敷地と寺社で占められ、城下は城内から明らかに分離されていた。

参考文献

岩原 剛 2006 「発掘調査からみえる吉田城」『検証・吉田城』豊橋市教育委員会

高田 徹 2006 「吉田城の縄張り—その変遷を中心として—」『検証・吉田城』豊橋市教育委員会

加藤理文 2006 「吉田城の石垣構築とその変遷」『検証・吉田城』豊橋市教育委員会



第3図 近世吉田城の構造 (1/10,000)

第2章 調査の目的と経過

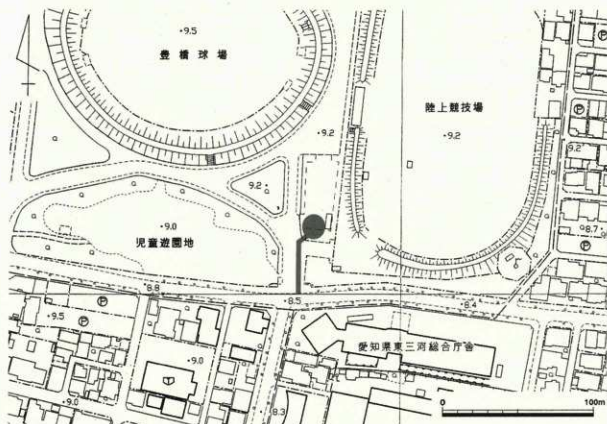
1. 調査にいたる経過 (第4図)

吉田城址は、豊橋市教育委員会や(財)愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、愛知県教育委員会などによって、これまで22次に及ぶ発掘調査が行われている。

今回実施した23次調査は、豊橋市市役所消防本部防災対策課が、吉田城址でもある豊橋公園内に「飲料水兼用耐震性貯水槽」の建設を計画したことに端を発する。この貯水槽は、来るべき東南海地震に備え、豊橋市内の公園を中心とする複数の箇所に貯水槽を設置するもので、防災用のほか、緊急時の飲料水確保を目的としている。この建設に関して、文化財保護法第94条にもとづく通知が平成17年5月27日付け豊橋市長名で提出されたのを受けて、豊橋市教育委員会が記録保存を目的とする緊急発掘調査を行うこととなった。

調査区の北側にある陸上競技場のトイレは18次、陸上競技場の観客席は19次調査の調査区である。いずれも遺構の残存状態が良好だったため、今回の調査区も着手前の時点から、同様に遺構が確認されたと考えられた。

調査区は、貯水槽の設置部分にあたる直径12mの円形部分と、貯水槽と上水道管とを結ぶ配管埋設部分(長さ約50m、幅2m)からなる、変則的な形状である。調査面積は282㎡である。



第4図 調査区位置図 (1/2,500)

2. 調査の方法と経過 (第5図)

今回の調査地は、近世吉田城の藩士屋敷地に相当する。幕末に描かれたとされる「吉田藩士屋敷図」によれば、調査区内の東側に倉垣源左右衛門、西側には長尾軍助・遠藤繁助らの屋敷地があったとされるところである。さらに18次・19次調査の成果から勘案すると、両屋敷地の間にあり、藩士屋敷地内を南北に貫いた八幡小路が検出される可能性が極めて高いと考えられた。

発掘調査は、平成17年7月25日～8月31日にかけて行った。まず、重機を使用して表土を除去し、続けて遺構検出を実施した。調査は廃土置き場の関係から南端の配管部分から着手し、徐々に北上して行った。また調査区を便宜的に南から北にかけて8地区に分け、遺構名を各地区ごとに付けた。配管部分の北端付近で、近世の屋敷地に伴うと思われる廃棄土壌や溝から大量の陶磁器が出土した。

調査が貯水槽部分に達すると、並行して南北に伸びる2条の溝が検出され、中から陶磁器や瓦が出土した。この溝には欄・塀の基礎である柱穴や布掘りの溝が並行しており、これらが藩士屋敷地を囲む区画溝や欄・塀に相当すると考えられた。また2本の溝にはさまれた部分は砂利を敷いて叩き締め、「舗装」されていることが判明し、当初想定した「八幡小路」の一部であることが明らかになった。

近世の道路遺構はすでに19次調査でも検出されていたが、今回検出された遺構は遺存状態が極めて良好であり、かつ視覚的にも分かりやすい形で検出された。そこで報道機関に成果の発表を行うとともに、平成17年8月28日に現地説明会を開催し、市民150人の参加を得た。



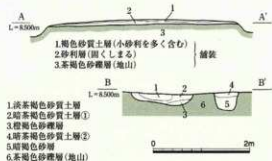
第5図 「吉田藩士屋敷図」上の調査区

第3章 遺構

1. 道路遺構 (第6・7図)

調査区北半の貯水槽設置部分において、主軸方位が北北東の、並行する2条の溝を検出した。溝(5区SD-1・8区SD-1)については後述するが、この溝に挟まれた部分には近世の遺構がまったく認められない空白部分であった。また表面が舗装と考えられる砂利層で叩き締められており、重機を使用した表土剥ぎ時にも明らかな硬化面と認識された。以上からこれは道路遺構であり、調査着手前から存在が想定された「八幡小路」跡と考えた。

道路遺構は溝上端で計測した幅3.9m、下端で計測した幅4.5mで、後者であればほぼ2.5間である。上面の削平を想定すると、2間または2.5間幅で計画的に造成されたと考えられる。調査区北半で検出された長さは12.8mであるが、もちろん本来はさらに長大で、調査区の南端付近(1区)でも続きの一部が検出されている。



第6図 八幡小路・8区SD-1・2土層図(1/80)

道路遺構の舗装は、地山面までを削り出したところに砂利を敷き詰めて固く叩き締め、さらに小砂利を多く含んだ褐色砂質土を敷いて叩き締めており、重機による表土剥ぎで若干上部を除去していることから、本来はさらに数層の砂利・砂利混じり土を重ね叩き締めていたと考えられる。検出された舗装は極めて固く、人力による除去は困難であった。

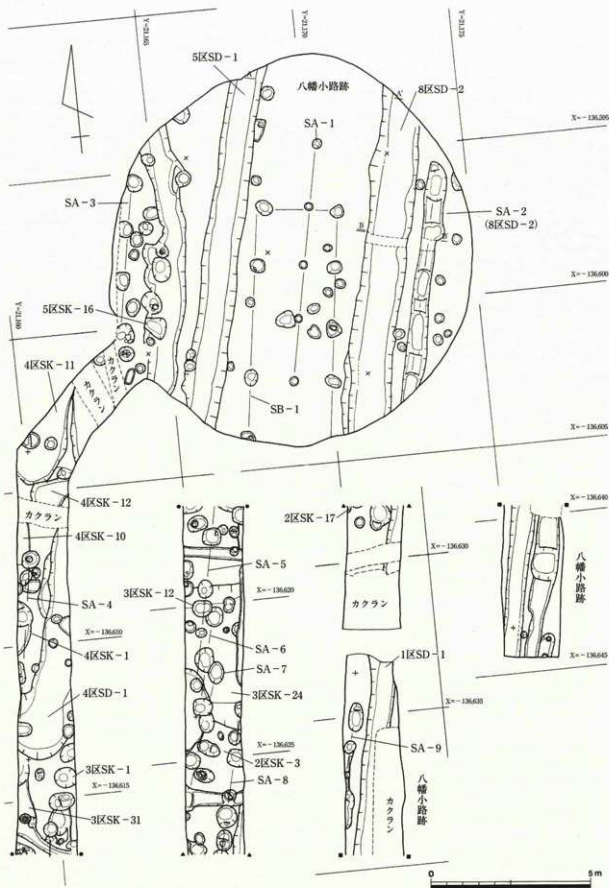
2. 掘立柱建物・柵 (第7～9図)

SB-1

道路遺構の舗装を除去したところ、近世をさかのぼる遺構としてSB-1が検出された。4間以上×1間の細長い建物で、柱間は桁行1.8m、梁間2.4mで、主軸方位は $N-9^{\circ}-E$ である。柱穴は平面円形もしくは楕円形を呈し、検出面での径は0.45～0.6m、深さは0.15～0.4mほどとばらつきがある。西辺は柱穴が1カ所認められなかった。出土遺物は無いが、他の建物と主軸方位が近似するため、古代末～中世前期の遺構と考えられる。

SA-1

道路遺構の舗装の下から検出された。柱穴5カ所が一行に並ぶため、便宜的に5間の柵と把握している。主軸方位は $N-14^{\circ}-E$ である。柱穴は平面円形を呈し、検出面での径は0.2～0.3m、深さは0.1～0.15mほどとごく浅い。出土遺物は無いが、道路遺構にほぼ平行しており、あるいは道路建設時の設定に関わる遺構かもしれない。



第7図 調査区平面図 (1 / 120)

SA-2 (8区SD-2)

道路遺構に平行して東側に存在する遺構で、北端は調査区内で取束するが、南側は調査区外へと続いている。幅0.5~0.65mの布掘りされた溝に、長楕円形の柱穴が連続しており、この布掘りを基礎地業ととらえるならば、櫓ではなく塼の可能性が高い。主軸方位は $N-11^{\circ}-E$ である。布掘り部分の断面形は箱形。埋土は礫を多く含む淡茶褐色砂質土と暗茶褐色砂質土で、比較的固くしまっていた(第7図)。出土遺物には近世の陶磁器片があり、遺構は八幡小路の東側に存在した武家屋敷地に伴うものだろう。この場合、幕末期では倉垣源左右衛門邸に相当し、北端の取束部分は屋敷地への出入り口であったと思われる。

SA-3

調査区の西端付近で一部が検出されただけであり、掘立柱建物の一部の可能性が高い。4カ所の柱穴が連なり、柱間は1.6~1.8m、主軸方位は $N-11^{\circ}-E$ である。柱穴は平面楕円形を呈し、検出面での径は0.45~0.7m、深さは0.25~0.45mほどとばらつきがある。出土遺物はないが、他の建物と主軸方位が近似するため、古代末~中世の遺構と考えられる。

SA-4

調査区の西端付近で一部が検出されただけであり、掘立柱建物の一部の可能性が高い。4カ所の柱穴が連なり、柱間は1.8m、主軸方位は $N-8^{\circ}-E$ である。柱穴は平面円形または楕円形を呈し、検出面での径は0.6m前後、深さは0.5mほどである。出土遺物はないが、他の建物と主軸方位が近似するため、古代末~中世の遺構と考えられる。

SA-5

一部が検出されただけであり、掘立柱建物の一部の可能性が高い。5カ所の柱穴が連なり、柱間は1.4~1.8m、主軸方位は $N-11^{\circ}-E$ である。柱穴は平面円形または楕円形を呈し、検出面での径は0.3~0.6m、深さは0.5mほどである。出土遺物には須恵器片や灰釉陶器片があり、遺構の時期は古代末と考えられる。

SA-6

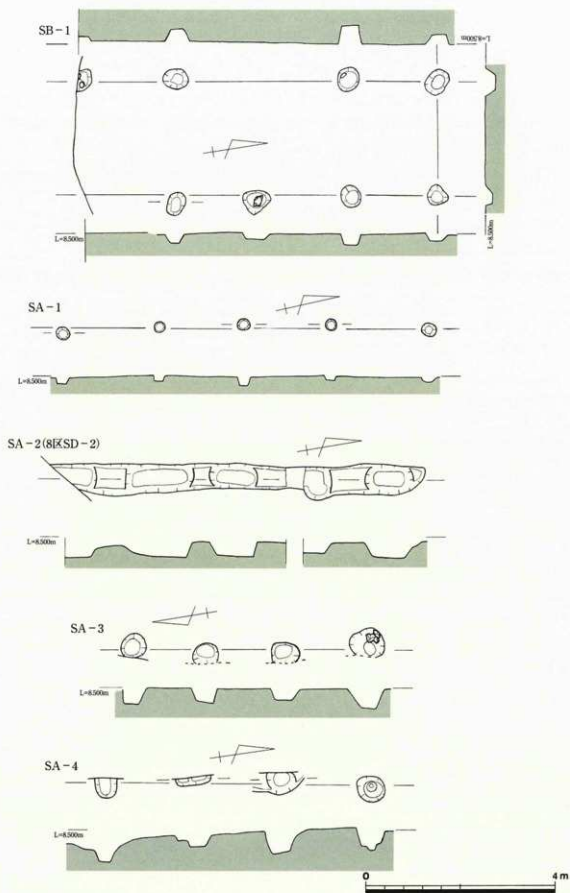
類似した規模・形態の柱穴3カ所が並ぶもので、掘立柱建物の一部の可能性が高い。柱間は1.4~1.6m、主軸方位は $N-12^{\circ}-E$ である。柱穴は平面楕円形を呈し、検出面での径は0.5~0.75m、深さは0.3~0.6mほどである。出土遺物には山茶碗の碗(第19図75)があり、遺構の時期は13世紀と考えられる。

SA-7

類似した規模・形態の柱穴4カ所が並ぶもので、掘立柱建物の一部の可能性が高い。柱間は1.35~1.8m、主軸方位は $N-17^{\circ}-E$ である。柱穴は平面円形または楕円形を呈し、検出面での径は0.55~0.7m、深さは0.2~0.5mほどとばらつきがある。出土遺物はないが、他の建物と主軸方位が近似するため、古代末~中世の遺構と考えられる。

SA-8

類似した規模・形態の柱穴4カ所が並ぶもので、掘立柱建物の一部の可能性が高い。柱間は1.6~1.8m、主軸方位は $N-13^{\circ}-E$ である。柱穴は平面円形または楕円形を呈し、検出面での径は0.6~0.75m、深さは0.4~0.65mほどとばらつきがある。出土遺物には山茶碗の碗及び中世前期の土師器・皿などが



第8図 掘立柱建物・柵-1 (1/80)

あり、遺構の時期は中世前期と考えられる。

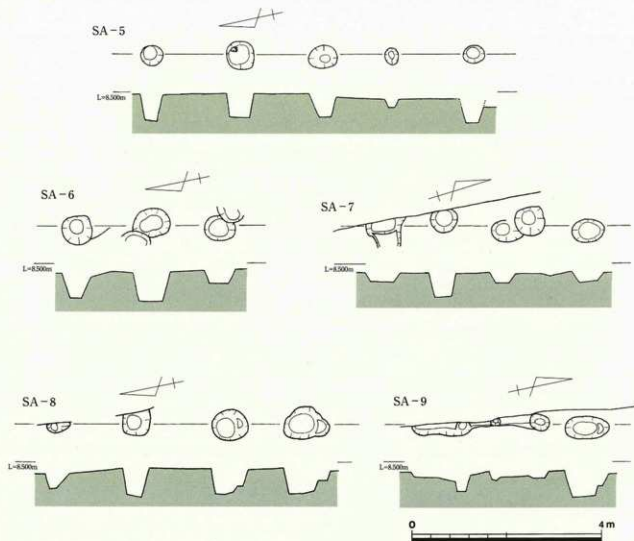
SA-9

調査区の南端付近で、一部を布掘りした柱穴列を検出した。道路遺構に平行しており、構もしくは塀と考えられる。柱間は0.7・0.9m、主軸方位はN-11°-Eである。柱穴は平面楕円形または長楕円形を呈し、検出面での深さは0.2~0.5mほどかなりばらつきがある。また布掘り部分の深さは0.1mほどごく浅い。出土遺物には灰釉陶器・碗（第19図70）があるが、近世の遺構だろう。

3. 溝（第6・7・10図）

1区SD-1

配管部分の南端から中程にかけて検出された溝である。主軸方位はN-10°-Eである。断面形は



第9図 溝-2 (1/80)

浅い箱形を呈し、地山面での検出幅は0.7m、深さは0.3m前後を測る。底は北から南に向け緩やかな下り傾斜となる。

出土遺物は小片のため図化しなかったが、陶器・摺鉢や土師器・皿や鍋があり、遺構の時期は近世である。なお、位置関係から本遺構は5区SD-1と同一の溝と想定され、八幡小路跡の西側側溝に相当するだろう。

4区SD-1

配管部分の北端付近で検出された溝である。西から北に向かってL字形に屈曲したコーナー付近で、主軸方位はN-15°-Eである。断面形は浅い箱形を呈し、地山面での検出幅は1.7~2.2m、深さは0.3m前後を測る。底は北から南に向け緩やかな下り傾斜となる。

溝の屈曲部分を中心に、大量の遺物が出土した(第10図)。遺物は溝の中いばいに存在し、陶磁器や土師器のほか、多量の石が混在している。石には円礫と角礫の両者が認められるが、加工されたものは無く、用途は不明である。

出土遺物には大量の陶磁器、土師器、瓦があり(第14~16図)、遺構の時期は18世紀末葉と考えられる。その形状から溝と判断したが、あるいは屋敷地内に設けられた廃棄土壌の可能性もある。

5区SD-1

防排水槽部分で検出された溝で、8区SD-1に平行しており、八幡小路の西側側溝に相当する。主軸方位はN-13°-Eである。断面形は浅い箱形を呈し、地山面での検出幅は1.0~1.2m、深さは0.1~0.2mを測る。底は北から南に向け緩やかな下り傾斜となっており、南半では杭列が認められたため、本来は内部に木組みの排水溝が存在した可能性がある。

出土遺物には灰軸陶器の碗、陶磁器、土師器、瓦などがあり(第17図)、最新の遺物の年代から遺構の時期は19世紀前葉と考えられる。

8区SD-1

防排水槽部分で検出された溝で、八幡小路の東側側溝に相当する。主軸方位はN-15°-Eである。断面形は浅い箱形を呈し、地山面での検出幅は1.2~1.4m、深さは0.2~0.35mを測る。底は北から南に向け緩やかな下り傾斜となっており、埋土は中央上部のみに分布する淡茶褐色砂質土と暗茶褐色砂質土とで明瞭に分けられ、埋没による掘り直しが明らかである(第6図)。

出土遺物には陶磁器、土師器、瓦などがあり(第18図)、遺構の時期は19世紀と考えられる。

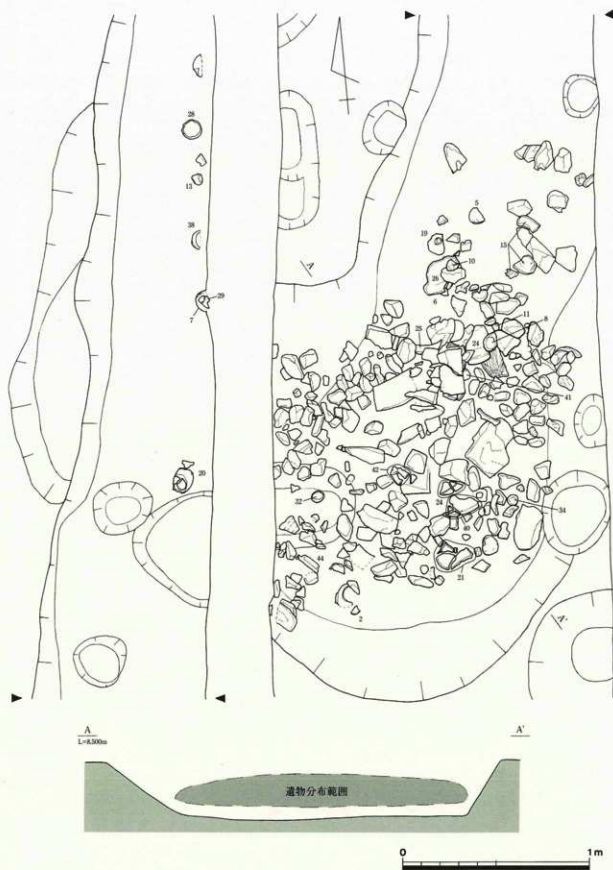
4. 土壙(第6・11~13図)

2区SK-3(第11図)

配管部分の中間付近で検出された柱穴で、2カ所が重複している。本来は掘立柱建物に伴うものだろう。長径0.7m、短径0.4m、深さ0.25mを測る。出土遺物には陶器の丸皿(第19図71)があり、遺構の時期は16世紀末葉と考えられる。

2区SK-17(第11図)

配管部分の中間付近、西壁に一部かかる形で検出された小ピットである。平面形は楕円形を呈し、



第10図 4区SD-1出土状況(1/20)

検出面で長径0.4m、深さ0.15mを測る。出土遺物には陶器の志野後皿（第19図72）があり、遺構の時期は16世紀末葉と考えられる。

3区SK-1（第11図）

配管部分の中間付近で検出された柱穴である。本来は掘立柱建物に伴うものだろう。平面形は円形を呈し、検出面で径0.7m、深さ0.7mを測る。出土遺物には陶器の摺鉢（第19図74）があり、遺構の時期は16世紀末葉と考えられる。

3区SK-12（第11図）

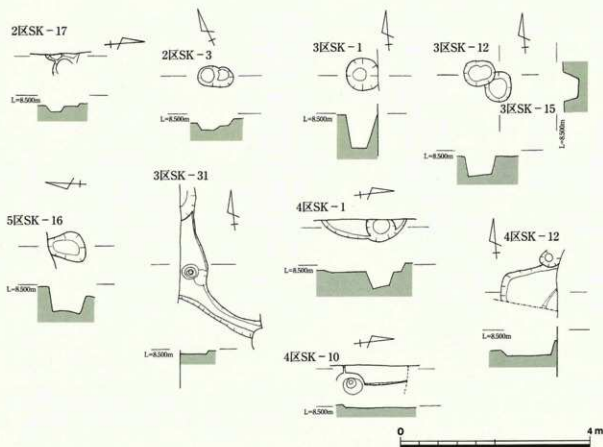
配管部分の中間付近で検出された柱穴である。本来は掘立柱建物に伴うものだろう。平面形は円形を呈し、検出面で径0.7m、深さ0.7mを測る。出土遺物には灰軸陶器の碗（第19図73）があり、遺構の時期は10～11世紀と考えられる。

3区SK-23（第12図）

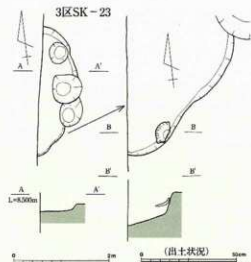
配管部分の中間付近で検出された土壇で、西側は調査区の壁に切られている。検出面での長さ2.8m、幅0.7m以上、深さ0.15mを測る。出土遺物には陶器の菊皿・皿・香炉（第19図77～79）、土師器の鍋（第19図80）があり、菊皿は遺構の南端で床面からやや浮いた状態で出土している。遺構の時期は18世紀中葉と考えられる。

3区SK-24（第6図）

配管部分の中間付近で検出された土壇で、西・東側は調査区の壁に切られているほか、SA-6・



第11図 土壇-1 (1/80)



第12図 土壌-2 (1/20・1/80)

7と重複している。検出面で南北4.5m、深さ0.2mを測る。出土遺物には灰軸陶器の碗(第19図76)があり、図化しなかった遺物も灰軸陶器片で占められる。したがって遺構の時期は10~11世紀と考えられる。

3区SK-31(第11図)

配管部分の中間付近で検出された土壌で、西側は調査区の壁に切られている。溝状の土壌で、検出面での長さ4.0m、幅0.4~0.7m、深さ0.1m前後を測る。出土遺物には須恵器の坏、灰軸陶器の皿、土師器の皿・甕(第19図81~84)があり、遺構の時期は10世紀と考えられる。吉田城をさかのぼる古代の官衙遺構に伴うものと考えられる。

4区SK-1(第11図)

配管部分の北寄り付近で検出された土壌で、西側は調査区の壁に切られているほか、SA-4の柱穴が重複している。浅い土壌で、検出面での長さ1.8m、幅0.45m以上、深さ0.15m前後を測る。出土遺物には陶器の鉢(第20図85)があり、遺構の時期は17世紀と考えられる。

4区SK-10(第11図)

配管部分の北端付近で検出された土壌で、北側は掘乱れで破壊され、また西側は調査区の壁に切られているほか、南東角はSA-4の柱穴が重複している。ごく浅い土壌で、検出面での長さ1.35m以上、幅0.4m以上、深さ0.1mを測る。出土遺物には縄文土器の深鉢、須恵器の坏身(第20図86・87)など古代以前の遺物がまともに見られる一方、陶器の壺や磁器の神酒徳利、皿(同88~91)があり、後者を混入品とするには躊躇を覚える。したがって遺構の時期は18世紀と考えられる。

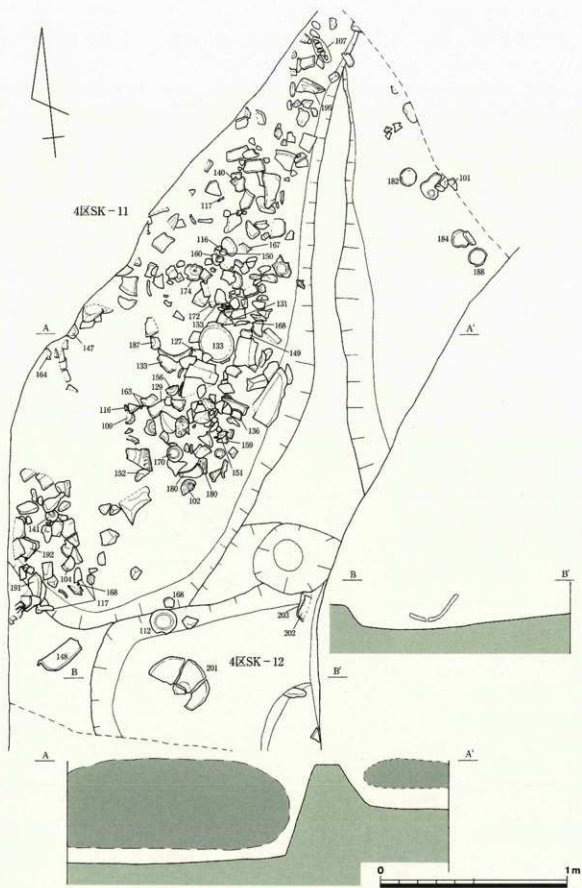
4区SK-11(第13図)

配管部分の北端付近で検出された土壌で、北・西・東側は調査区の壁に切られている。当初は調査区の幅いっぱいに遺構が検出されたため一度に掘り下げたが、最終的には東西で2つの土壌に分かれる形となった。西側は検出面での長さ3.25m、幅1.55m以上、深さ0.55m、東側は長さ2.45m以上、幅0.9m以上、深さ0.25m前後を測り、いずれも断面形は箱形を呈する。

西側の土壌で大量の遺物が出土したほか、東側でもまともな量が出土している。西側の土壌は底から上までほぼいっぱいに遺物が存在し、遺物を短時間の内に一括廃棄した様子がうかがえる。また東側の土壌は遺物の量こそ少ないが、底からわずかに浮いた状態で出土した。

ところで、遺物の大半は陶磁器、土師器、瓦だが、石を多く含んでいる。石は明らかな加工痕を残すものはほとんど無く、自然の円礫・角礫であり、その用途は不明である。

出土遺物には縄文土器(第21図95)、灰軸陶器(同96~98)、近世の陶器(同99~第23図148)、磁器(第23図149~第24図181)、土師器(第25図182~192)、瓦質土器(同193)、土製品(同194)、瓦(同195~199)、石製品(同200)があり、遺構の時期は19世紀中葉と考えられる。遺構は武家屋敷地に設けられた廃棄土壌だろう。なお、灰軸陶器は混入品だが、三叉トチの存在は興味深い。



第13図 4区SK-11・12出土状況(1/20)

4区SK-12 (第13図)

配管部分の北端付近で検出された土壌で、東側は調査区の壁に切られているほか、南側は攪乱に破壊され、北側は4区SK-11に接している。遺構検出時には4区SK-11と明らかに区別されたため、別の遺構として掘り下げている。検出面での長さ1.25m、幅0.55~0.95m、深さ0.55mを測り、断面は箱形を呈する。出土遺物には瀬戸美濃産陶器の摺鉢(第20図92)、陶器の鉢(第26図201)、瓦(第20図93、第26図202・203)があり、遺構の時期は18世紀後葉と考えられる。

5区SK-16 (第11図)

防災水槽部分の西端付近で検出された柱穴と考えられる土壌で、溝と重複している。平面形は不整な楕円形で、検出面での長さ0.8m、幅0.65m、深さ0.6mを測る。出土遺物には土師器の皿(第20図94)があり、遺構の時期は16世紀後葉と考えられる。戦国期吉田城の遺構だろう。



「へ幅小路」を歩く

第4章 遺物

1. 柵 (第19図)

SA-6 (75)

75は山茶碗の碗の高台付近である。渥美・湖西窯産でⅢ期に位置づけられる。

SA-9 (70)

70は灰軸陶器の碗の高台付近である。高台の端部は欠損している。O-53~H-72窯式期に位置づけられる。

2. 溝 (第14~18図)

4区SD-1 (1~44)

1~25は陶器で、大半が瀬戸美濃窯産である。1は天目茶碗、2~6は丸碗で、4には呉須が散らされる。7・8はいずれも腰が張った拳骨茶碗で、鉄軸が施される。9は腰折碗で、腰が強く屈曲して外面は稜を成す。11は筒形碗で外面には呉須・鉄絵が見られる。12は丸碗だが胎土が赤褐色を呈しており、瀬戸美濃窯産ではない。灰軸のほか、一部に長石軸が施される。14・15は片口鉢で灰軸掛け。16は灯明皿で内面にトチンの跡が残る。17は端反となった志野丸皿である。18は織部の向付と考えられる破片で、内外面ともに銅緑軸が厚く掛かる。また内面には布目が見られる。19・20は徳利である。20は内面の底に鉄塊が付着するほか、内面一面に薄く鉄分が付着しており、お歯黒用の鉄鑿壺として再利用したものと思われる。21は十能で、把手は欠損している。全面に鉄軸が施される。22~24は摺鉢で、22は明らかな小型品である。24には「元山」の印刻が見られる。25は黄瀬戸鉢で、口縁は折縁となる。内面にはヘラ描きの緩やかな波状文が見られる。

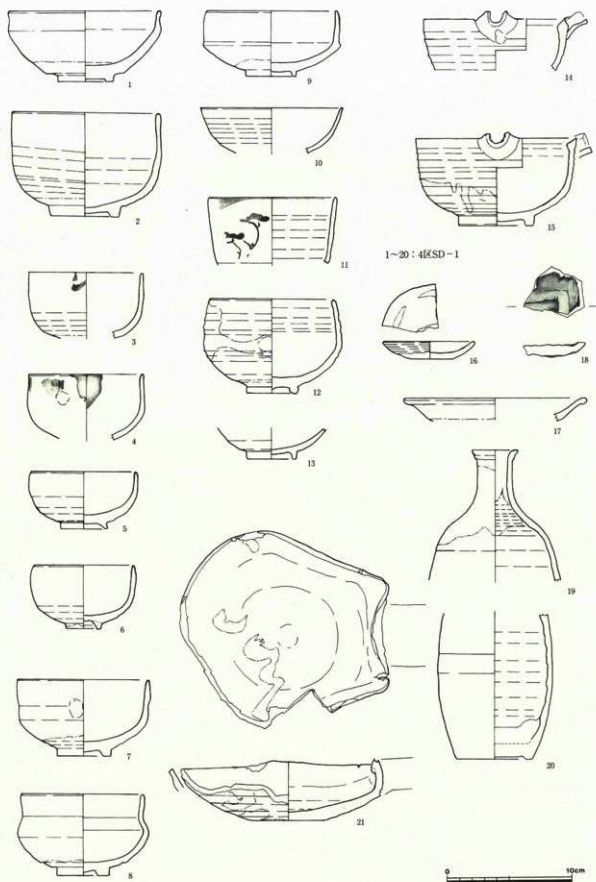
26は土製品の火鉢で、足の数は推定である。内面にはススが付着している。三河産であろう。

27~30は磁器で、胎土から多くが肥前産と推定される。27は染付の端反碗、28は口縁が内碗した碗で、口縁端部は鉄軸の口紅が施される。29は染付の丸碗としたが、法量は鉢にも近い。30は青磁の不明品で、口縁部は折縁となる。

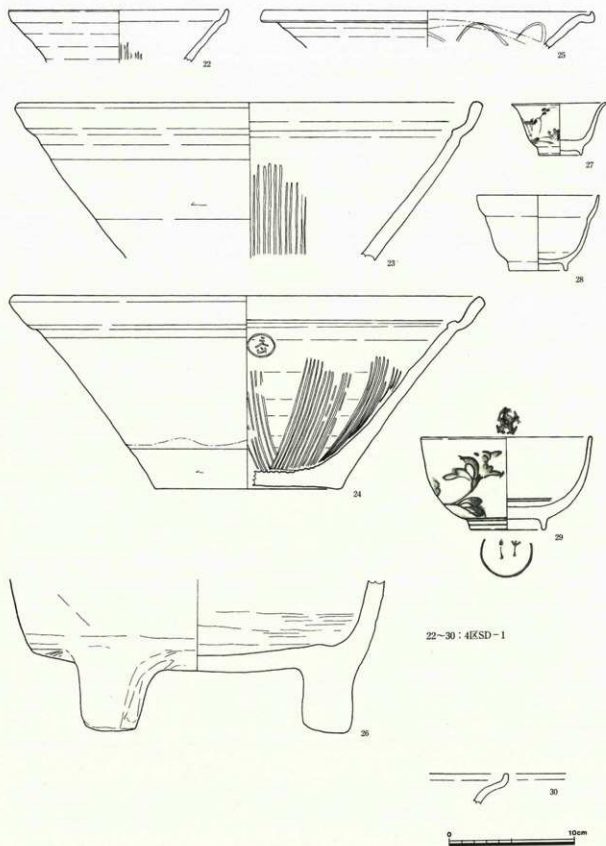
31~43は土師器である。31~39は皿で、31はロクロ成形、ほかは手づくね成形されたものである。手づくね成形皿は口径7cm前後と9cm前後の2法量に分かれるようである。40・41は焙烙である。42・43は焼塩壺の身で、いずれも印籠蓋形式となる。42の内面には粘土のシボリ目が明瞭に観察され、43は粗い繊維状の当てものを当てた痕跡が見られる。

44は軒平瓦で、中心飾りである花文の左右に複線で唐草文が表現される。

これらのうち、年代の指標となる瀬戸美濃窯産陶器はおもに登窯第4小期~第8小期の製品までが認められ、第10・11小期である灯明皿は同時期の遺物が極めて少ないことからすれば混入品と考えられる。また一括性が極めて高い出土状況から、長期間にわたる廃棄行為を示すものとは考えられず、



第14図 出土遺物一1 (1/3)



22~30: 4区SD-1

第15図 出土遺物一2 (1/3)

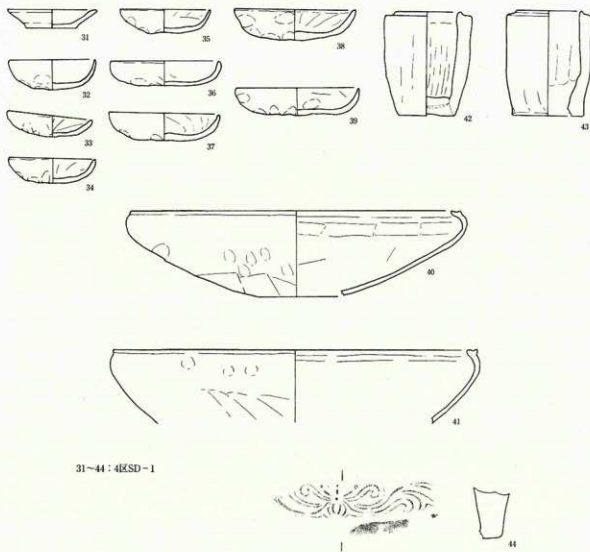
伝世品を含む遺物が18世紀末葉に一括廃棄されたと考えたほうが良いだろう。

5区SD-1 (45~60)

45~47は混入品である。45は灰釉陶器の碗の底部、46は青磁・蓮弁文碗の体部片。47は渥美・湖西窯産山茶碗の底部である。

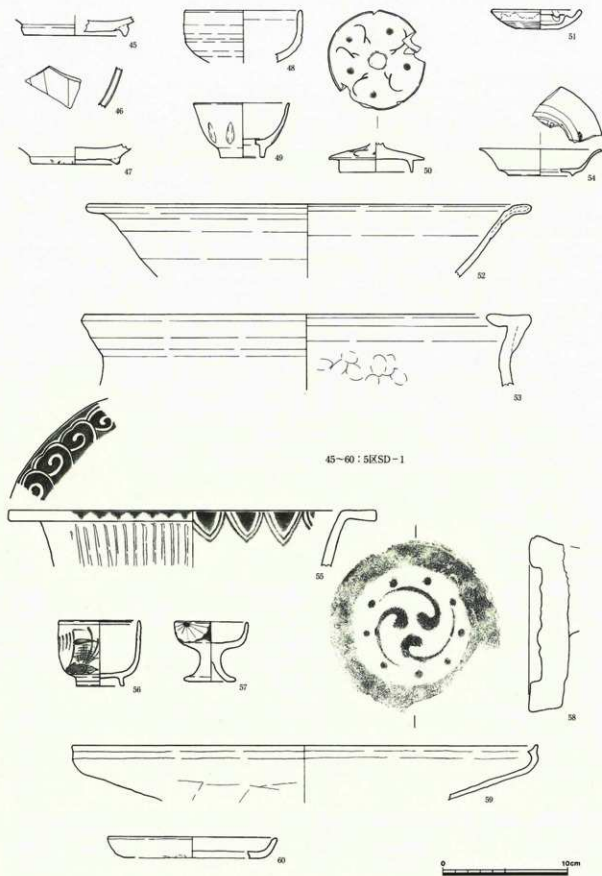
48~53は陶器である。48は腰錡茶碗。49は湯呑で、体部下半に断続的にソギを入れる。瀬戸美濃窯産ではない。50は土瓶の蓋で、鉄絵や呉須絵を施したのち、灰釉を掛ける。51は灯明皿の受皿で、灰釉掛け。52は折縁鉢で全面に灰釉を施す。53は口縁部の形態から、常滑窯産のくどと考えられるが、ススは付着していない。

54~57は磁器である。54は白磁の棧皿である。器壁は極めて浅く、内面の見込に押印による文様が存在するようだが、残存状態が良くないため内容は不明である。55は染付の植木鉢で、口縁部は水平に引き出される。56は染付の丸碗形湯呑。57は仏飯器である。



31~44: 4区SD-1

第16図 出土遺物-3 (1/3)



第17図 出土遺物-4 (1/3)

58は三巴文の軒丸瓦である。周縁の瓦当の枠の当たった部分が段になっている。

59・60は土師器である。59は焙烙。60は手づくね成形の皿で、口縁部は強くヨコナデされる。

これらのうち、年代の指標となる瀬戸美濃窯産陶器は登窯第9小期のものが確認される。つまり遺構の時期は19世紀前葉だろう。

8区SD-1 (61~69)

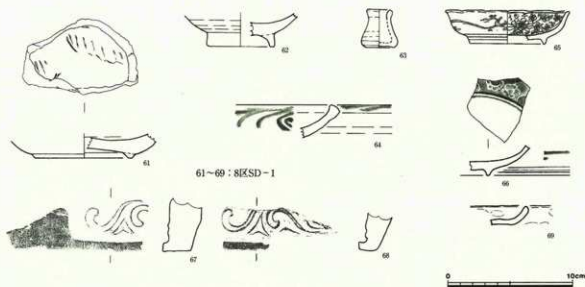
61は渥美・湖西窯産山茶碗の底部である。内面の見込にはヘラによる線刻画が認められる。62~64は陶器で、62は丸碗、63は小瓶で、線香立てに使用したものか。64は馬目皿で、鉄絵ののち灰釉が施される。

65・66は磁器である。65は口縁部が波状を呈した染付の稜花皿で、いわゆる型打皿である。66は染付の皿である。

67・68はいずれも軒平瓦と考えられ、複線の唐草文である。

69は土師器の手づくね成形皿である。

馬目皿の存在から、遺構は19世紀のものだろう。



第18図 出土遺物-5 (1/3)

3. 土壙 (第19~26図)

2区SK-3 (71)

71は瀬戸美濃窯産陶器の丸皿で、内外面に鉄軸が施される。大窯4前半に比定される。

2区SK-17 (72)

72は瀬戸美濃窯産陶器の志野棧皿で、大窯4前半に比定される。

3区SK-1 (74)

74は摺鉢で、口縁部は外側に折り返す。大窯4前半に比定される。

3区SK-12 (73)

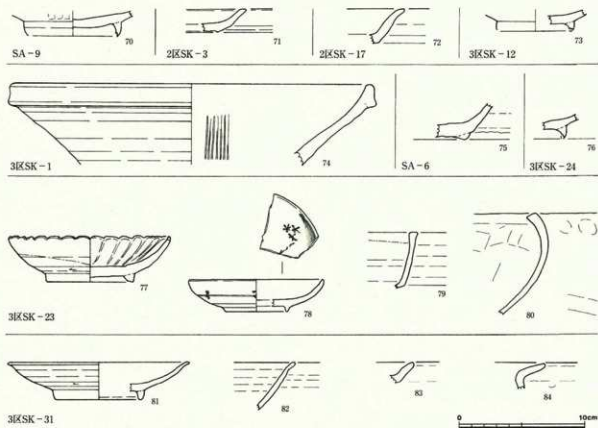
73は灰軸陶器の碗で、高台の端部は欠損する。底部には回転糸切り痕が明瞭である。O-53~H-72窯式期に比定される。

3区SK-23 (77~80)

77・79は瀬戸美濃窯産の陶器である。77は菊皿で、内外面に灰軸が施される。79は筒形香炉で、登窯第7小期に比定される。78は染付の皿である。80は土師器の半球形鍋で、口縁部は強く内弯する。

3区SK-24 (76)

76は灰軸陶器の碗で、高台の端部は欠損する。底部には回転糸切り痕が明瞭である。O-53~H-



第19図 出土遺物-6 (1/3)

72窯式期に比定される。

3区SK-31 (81~84)

81は灰釉陶器の皿で、K-90~O-53窯式期に比定される。82は須恵器の坏である。83・84は土師器である。83は小型の皿で、口縁部は強くヨコナデする。84は甕の口縁部である。

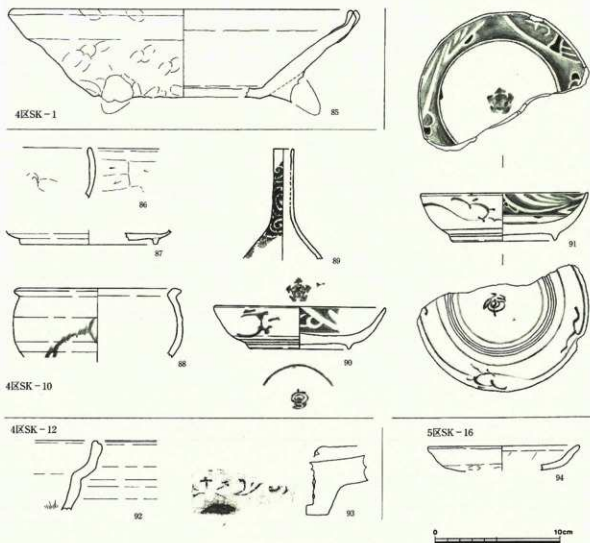
灰釉陶器の年代から、遺構は9世紀末~10世紀初頭のものだろう。

4区SK-1 (85)

85は常滑窯産陶器の火鉢で、足は欠損するが本来は三足である。口縁部はヨコナデされ、体部外面は指押さえが顕著である。内面にはススが附着する。17世紀のものだろう。

4区SK-10 (86~91)

86は縄文土器の深鉢と思われる。外面はケズリ調整され、内面はナデである。晩期のものだろう。87は須恵器の坏である。88は陶器の壺で、内外面に鉄釉が施される。89~91は磁器の染付で、89は色絵染付の神酒徳利、90・91は皿である。90・91は文様構成が共通しており、一組で使用されたものだろう。



第20図 出土遺物-7 (1/3)

4区SK-11 (95~200)

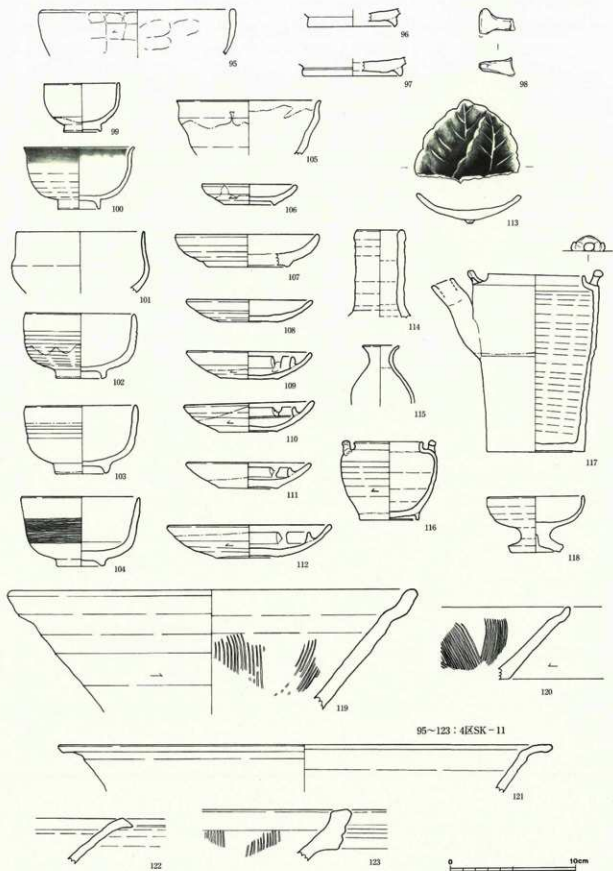
95は縄文土器の深鉢と思われる。外面はケズリ調整され、内面はナデである。86と同一品かもしれない。

96~98は灰軸陶器で、97は高台の断面形がやや厚く、崩れている。底部は96が回転糸切り、97が回転ヘラケズリである。98は三叉トチで、通常ならば生産地で出土すべきものである。

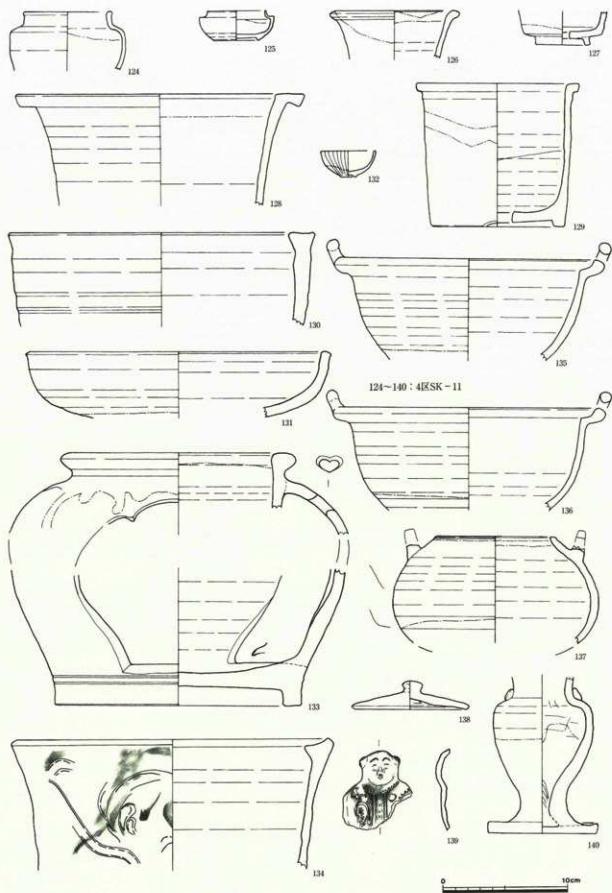
99~148は陶器で、多くは瀬戸美濃窯産である。99~105は碗類で、99は小坏、100は湯呑で、全面に灰軸が施され、さらに口縁部は銅緑軸が掛かる。101は腰のふくらみが強い碗である。102~104は腰鎗茶碗で、104は腰の張りが強く、やや古い形態である。105は全面に鉄軸が施され、口縁部には長石軸が掛かる碗で、産地は分からない。106~112は皿類である。106は瀬戸美濃大窯製品の丸皿、107は志野丸皿で、見込の鉄絵は無い。108は灯明皿で、内外面に鉄軸が施される。109~112は灯明皿受で、すべて鉄軸が施される。113は木の葉形をした型打皿で、足が貼り付けられ、本来は恐らく三足であろう。上面には銅緑軸が厚く掛かる。114は徳利で、口縁部から頸部は長く伸びる。115も小型の徳利で、恐らく神酒徳利だろう。鉄軸が施され、白泥で書かれた「神」の文字が見られる。116は双耳壺。117はちろりで、上部には灰軸が、下部には鉄軸が施される。118は仏飯器で文様は無い。119~123は鉢類である。119・120は摺鉢で、119は小型品である。121は折縁鉢で、内外面に灰軸が施される。122も灰軸の鉢。123は厚い口縁帯を持った摺鉢で、堺産と思われる。124は内外面に灰軸が施された壺。125は灰軸掛けの蓋物である。126~129は植木鉢である。126は灰軸の後、口縁部に鉄軸が施される。127は底部の中央が焼成前穿孔される。128は内外面に灰軸が施され、129は灰軸の後、一部鉄軸が施される。130は鉄軸の半胴甕。131は灰軸掛けの大皿。132は灰軸掛けの紅皿である。133は焜炉で、肩から上と底部は接合しないが同一品と考えた。外面にはうのふ軸が掛かる。134は水甕で、灰軸の後一部銅緑軸が掛けられたうのふ軸のものである。外面には被熱痕が残る。135・136は鍋で、2カ所の把手が付き、内外面には鉄軸が施される。137は土瓶。138は蓋で、土瓶に伴うものか。139は人形で、中国の子供(唐子)を表現したものだだろう。灰軸の後、体部に銅緑軸が掛けられる。140は仏花瓶で、灰軸と鉄軸が掛け分けられる。141~145は陶胎染付である。141は丸碗、142・143は広東碗、144は小坏、145は皿で、底部の中央は蛇ノ目凹高台を模している。146~148は常滑窯の製品である。146・147は甕、148は鉢で口縁部は水平に引き出される。

149~181は磁器で、149~151は白磁、ほかは染付である。149~170は碗類で、149~151は小坏、152・153は丸碗、154・155は湯呑、156・157は筒型湯呑、158は大型の筒形碗、159~164は端反碗である。165~168は広東碗、169は波状口縁の後花碗である。170は筒形碗であろう。171~175は皿類である。171・172は底部が蛇ノ目凹高台となる。175は後花皿で型打ち製品だろう。176は蓋で、上面は亀甲文である。177・178は仏飯器。179は色絵の箱形水滴。180・181は鉢で、いずれも口縁部内面は無軸である。182~192は土師器である。182は焼塩壺の蓋で、内面には布目がある。183は焼塩壺の身。184~188は皿である。184・185は手づくね成形され、186も手づくねだが体部を強くヨコナデし、口縁端部は面を持つ。187・188はロクロ成形された皿である。189~192は焙烙で、190のみ口縁部を内側に引き出した特異な形態をとる。

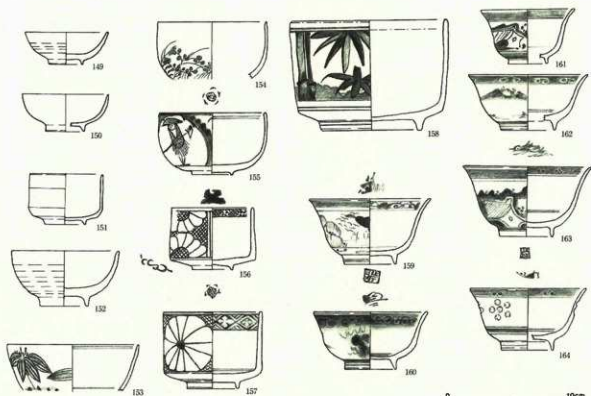
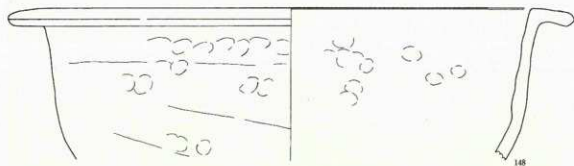
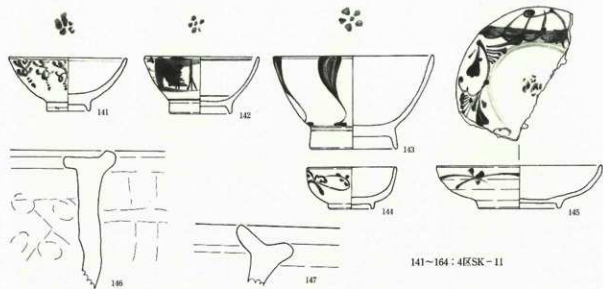
193は瓦質土器で、風炉と考えられるが内面にススは見られない。2カ所の把手が付き、それぞれ



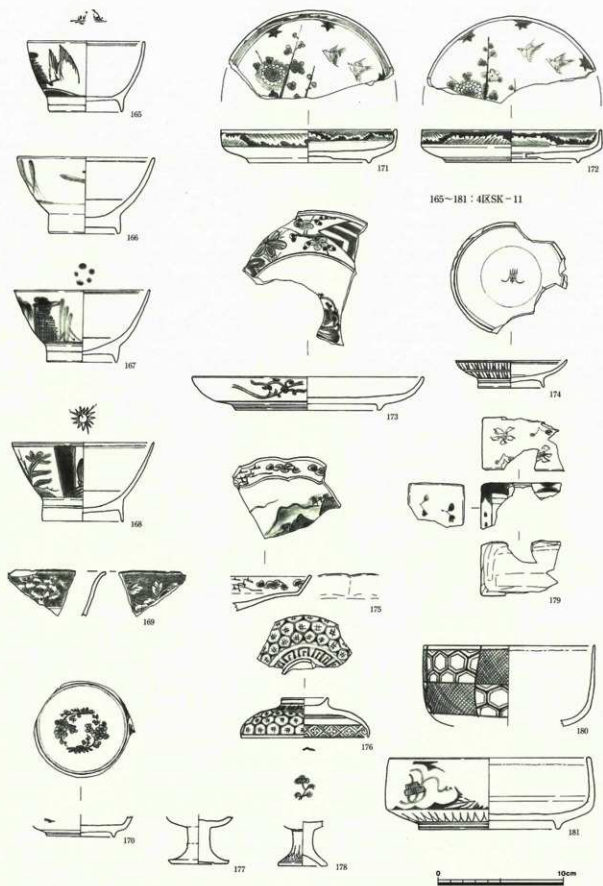
第21図 出土遺物-8 (1/3)



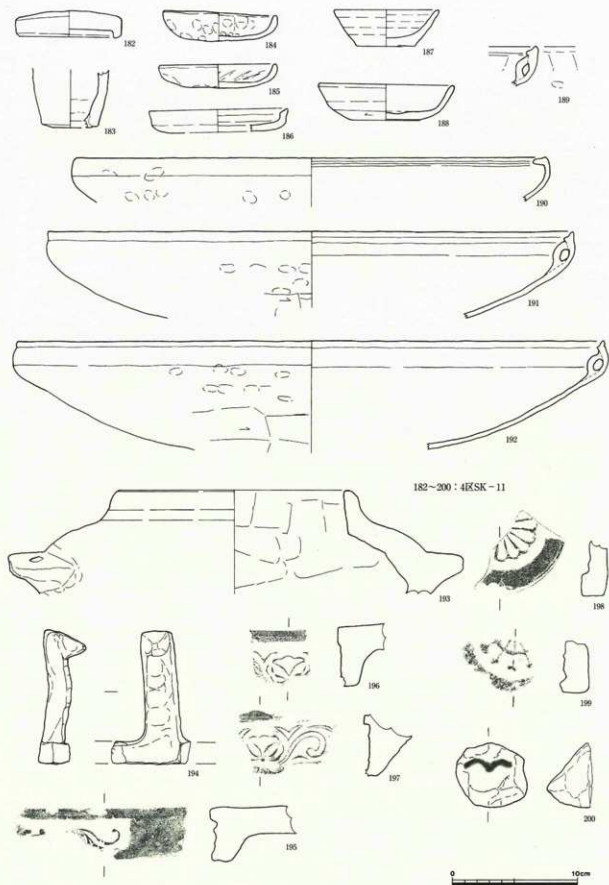
第22図 出土遺物-9 (1/3)



第23圖 出土遺物-10 (1/3)



第24図 出土遺物-11 (1/3)



第25図 出土遺物-12 (1/3)

に2カ所づつ竹管の刺突が見られる。

194は土製品の五徳である。外面は指押さえが顕著である。本来は3～4カ所の支持部を持ち、円環状部分に接合していたのだろう。

195～199は瓦である。195～197は軒平瓦で、195は単線の、196・197は複線表現の唐草文が見られる。198・199は棟に使用された練込瓦で、198は菊花文、199は車輪文である。

200は石灰岩に墨書されたもので、意図不明のものである。人間の顔面を表現したようにも見える。

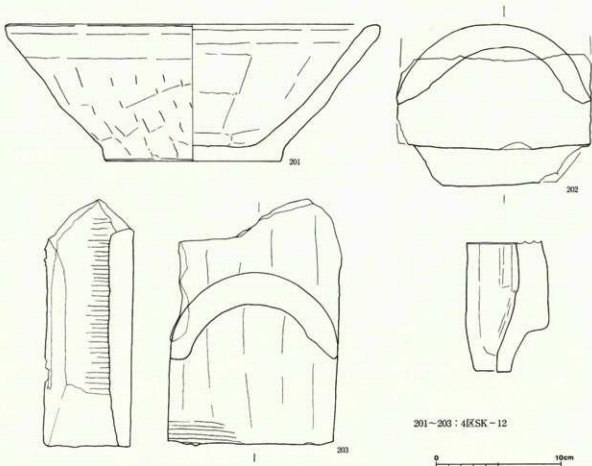
これらのうち、年代の指標となる瀬戸美濃窯産陶器は、登窯第3小期や第6小期と思われるものも存在するが、主体となるのは第8小期以降のものである。従って遺構の時期は18世紀末葉～19世紀前葉と考えられるが、灯明皿受のように第11小期のものがまともまっていることからすれば、主体の時期は幕末である19世紀中葉とするのが妥当だろう。

4区SK-12 (92・93、201～203)

92は瀬戸美濃窯産陶器の摺鉢で、登窯第8小期に比定される。201は常滑窯産陶器の鉢で、口縁部がヨコナデされ、体部は内外面とも板ナデである。17世紀のものだろう。93、202・203は瓦である。93は唐草文が単線表現され、202・203は丸瓦で203は先端、204は下端付近だろう。

5区SK-16 (94)

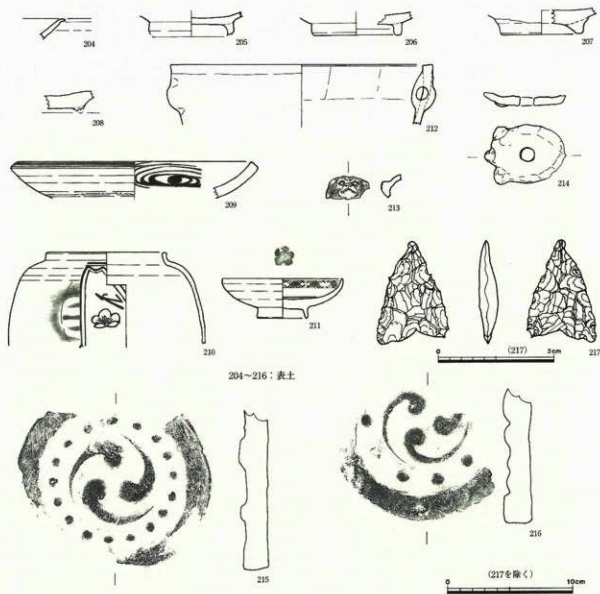
94は土師器の皿で、口縁部はヨコナデされ、端部内面はわずかに面を持つ。16世紀のものだろう。



第26図 出土遺物-13 (1/3)

4. 表土 (第27図)

204~206は灰釉陶器で、204は皿、205は碗の高台、高台の厚い206は壺と考える。207・208は山茶碗の碗で、いずれも渥美・湖西窯産である。209・211は陶器である。209は瀬戸美濃窯産の馬目皿、210は産地不詳の土瓶と考えられ、体部には鉄絵が見られる。211は磁器・染付の皿。212は土師器の半球形鍋で、径は小さい。体部は深く、器壁は比較的厚いので、戦国時代のものだろう。213・214は土人形で、213は犬の顔面部、214は亀の腹部である。214の中央は焼成前穿孔され、足・頭(尾?)の表現は粘土の貼り付けである。215・216は三巴文の軒丸瓦。217は石鏝で、石材はチャートである。



第27図 出土遺物-14 (1/1・1/3)

第5章 総括

1. 調査区内の遺構変遷

今回の調査区は極めて狭く、遺構の配列など有機的な関係は明らかにしにくい。しかし、出土遺物から遺構はおおむね①古代～中世（前期）、②戦国時代、③近世に大きく分けることが可能である。

①は渥美郡衙の可能性が指摘される古代の遺構、及び中世における伊勢神宮領である飽海神戸等の遺構、②は戦国期吉田城に関連する遺構、③は近世吉田城の武家屋敷地に関係する遺構と考えられる。

①にはSB-1のほか、SA-3～8など掘立柱建物・櫓や3区SK-24・3区SK-31など灰釉陶器が主に出土した性格不明の土壌が挙げられる。建物・櫓は配置構成が分からないため評価が難しく、柱穴の規模から集落を構成するものと考えられる。

②には2区SK-3、2区SK-17、3区SK-1、3区SK-12、5区SK-16などの柱穴がある。建物としての認定は難しいが、付近には当時の掘立柱建物群が存在したのだろう。戦国期吉田城の中核は、調査区の北側である豊川沿いであったと推定されるため、これらの遺構は家臣団の屋敷地や城下など、城に付随する遺構の可能性が高い。

③は特に18～19世紀の遺構が多く、近世吉田城の家臣団屋敷地を構成する遺構と考えて良いだろう。調査区を南北に貫く八幡小路と、それに沿って存在する溝や堀跡は、まさしく江戸時代の城内の姿を彷彿とさせる。さらに4区SD-1や4区SK-11は屋敷地で使用されたものを大量に廃棄した遺構であり、とくに後者は年代が19世紀中葉と推定されるため、明治維新後の屋敷地の廃絶・撤去に伴う可能性がある。こうした幕末～明治期にかけての廃棄土壌は過去の発掘調査でも多数確認されており、いずれも大量の遺物が出土する。

2. まとめ

今回の調査は、狭い調査区ではあるが古代～近世にかけての遺構が検出され、従来の吉田城址の発掘調査と同様の状況が確認された。その中で、八幡小路の遺構に比定される道路遺構が検出されたのは大きな成果であった。道路の上面は砂利や小砂利を積み上げ固く叩き締めており、まさしく舗装されていた。さらに側溝に相当する溝や堀跡は、現存する吉田城大手門の古写真において、開門した先にわずかにかいま見える風景を彷彿とさせるものだった。屋敷地の構造や出土遺物の組成ばかりが取り上げられる武家屋敷地の調査において、当時の風景を視覚的に訴えかける本遺構の調査意義は大きい。今後も調査を重ねる中で、屋敷地の姿がより具体的に明らかになることだろう。

また、近世の廃棄土壌や溝から出土した多量の遺物は、近世後期の豊かな商品経済を雄弁に物語る。陶磁器は瀬戸美濃窯や肥前窯を主体としており、多くは生活雑器であるが、土製風炉や土人形などこれらに属さない焼物製品が遺物組成の一部を成すことに留意したい。

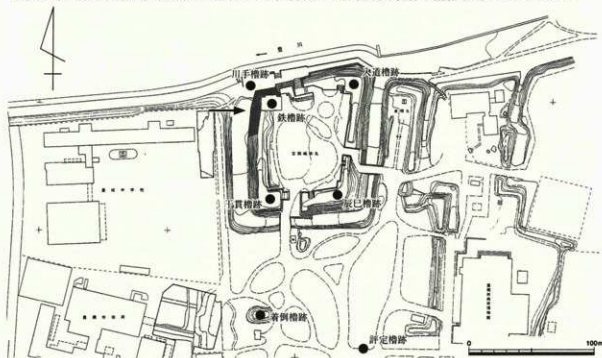
付載1 吉田城址本丸鉄槽下石垣の測量調査

調査の経緯と経過 (第28図)

吉田城址の本丸には、近世に三重槽の鉄槽、千貫槽、辰巳槽、二重槽の入道槽の4基の槽が存在していた。その様子は、近世に描かれた「吉田城本丸之二丸略絵図」で知ることができるほか、現地には今も槽台が現存している。従来、吉田城は天守の無い城とされてきたが、鉄槽は建築史の立場から天守級の規模を持っていたと指摘され(三浦2006)、後述する石垣の構造から、天正18年(1590)～慶長5年(1600)に城主として吉田城を整備した池田輝(照)政は鉄槽部分に天守を建造した(しようとした)のではないかと、とする城郭研究者の指摘もある(加藤2006)。城内の他とは明らかに様相が異なる鉄槽下の石垣は、現存する吉田城址の遺構の中でも重要なポイントのひとつである。

ところで、吉田城址は都市公園である豊橋公園として整備され、市役所公園緑地課の管理下にある。鉄槽跡には昭和29年の産業大博覧会に際して建設された復興槽が存在する。近年、鉄槽の東に隣接した武器庫跡下の石垣が崩れだしているのではないかと、との指摘が成されるようになり、レーダー探査による健全性調査が行われた。その結果、意外なことに石垣の裏側には空間は無く、ほぼ安定した状態であるとの結果になった。一方で、池田期の構築とされる鉄槽下石垣について注意が向けられ、野面積みの特徴である不整形な石材を使用した間隙の多い積み方のため、遊離した間詰め石が転落するのではないかと懸念が呈されるようになった。確かに、石垣の周囲には転落したと思われる石材が散見され、公園管理の問題から、このような状況は看過できない状況であった。

こうした中で、市教育委員会と公園緑地課との間で話し合いが持たれ、石の追加による間詰め工事や遊離した石材を補強するほか、亀裂を生じ脆弱になった石垣の石材を補修することとなった。



第28図 鉄槽下石垣の位置 (1/3,000)

それを行うにあたり、文化財保護担当部局である市教育委員会では次のような方針を立て、施工部局である公園緑地課に提言を行った。

- ①補填する石材には、今回のものと分かるようドリルで孔をあけるなど、目印を付ける。
- ②石材の間詰め工事に先立ち、石垣の現況測量図を作成する。その測量図に、どの部分が後から補填した石材が分かるように、位置を明示する。

提言の通り公園緑地課が間詰め工事を実施し、事前の現況測量図の作成は市教育委員会が行った。間詰め補填石材は、外観の違和感が無いようにチャートを使用した。測量の実施業者は(株)パスコ、間詰め工事の施工業者は(株)間組である。間詰め工事に際して、市教育委員会職員がたびたび立ち会いを行い、作業状況の確認を行った。作業期間は平成17年8月中である。

なお、石垣のうち本丸の内側に面したところは、復興槽の建設時にすでに積み直されているが、石垣を構成する石材自体が抜け落ち、崩壊する危険性があったため、すべて積み直すこととなった。積み直し工事中には市教育委員会職員が立ち会い、この際に再利用された石垣裏込め石材の中から石塔の部材・破片や茶臼の破片を採集した。

鉄槽下石垣の構造 (第29図)

この石垣については、かつて加藤理文氏による報告(加藤2006)がなされているため、今回はそれにもとづきながらももう少し詳しく説明する。

鉄槽下の石垣は本丸の北面と西面の2面が存在する。現況の規模は、北面が最大長17.6m、高さ10.0m、西面が長さ36.0m、高さ11.6mを測る。このうち北面、及び西面の北側から13.6m付近、すなわち復興鉄槽直下の高さ1.5~2.5m程度は積み直されている。

鉄槽下の石垣には、チャート、石灰岩、花崗岩などが使用される。チャートは東三河を貫流する豊川の左岸域、弓張山系を構成する主要岩石で、渥美半島から三重県まで分布が継続する。また石灰岩はチャートの岩脈に混在する岩石で、豊橋市域では北部の石巻地区、隣接する渥美半島の田原市域では白谷地区に路頭が存在する。さらに、花崗岩は豊川の右岸域に存在し、海浜部の蒲郡市や西三河地方の海岸部にも良質な路頭が存在する。石材の主体はチャートであるが、これを豊橋市北部で採取した場合、豊川の流れを利用すれば当該地まで直接の搬入が可能である。

築石(石材)はその性格から加工痕が見いだしにくく、自然石との区別は難しいが、全体的に直方体を呈することから粗割石であろう。大型・中型の石を用いた典型的な野面積みである。矢穴が明瞭に観察される例は存在しない。この点、隣接する武器庫石垣や北多門、南多門や水門周辺の石垣がすべて花崗岩からなり、矢穴の痕跡が明瞭であるのとは対照的である。

最下部には中型石を使用するが、下部から4~5m前後に大型の築石を使用する傾向がある。ここでは北面・西面ともに明瞭に横方向の目地が観察され、石垣構築の休止面ではないかと考えられる。いずれの築石も横置きを基本としている。

間詰め石は粗割りした際に出た残石と考えられる石材を利用するほか、豊川の河原から採集した川原石も使用している。

隅角の算木は未発達であるが、大型の石材を左右に振り分ける意識は認められる。石垣の傾斜角は

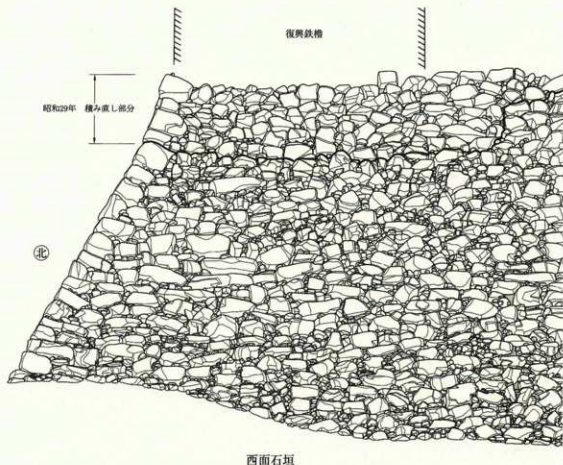
50~60度とかなり緩やかで、古式の様相をとどめている。西面石垣の天端にならぶ小型石材は、鉄槽に接続する近世の塼の基礎である。

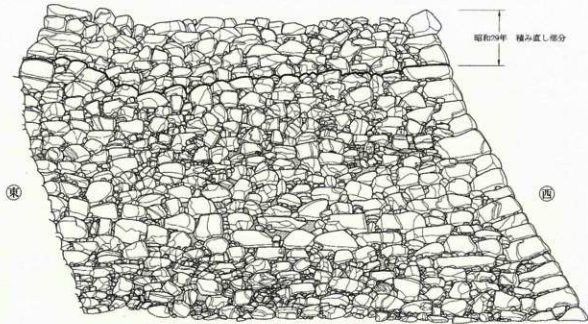
ところで、西面石垣の南端は隅角を成して飛び出すことなく素堀りの堀の斜面へと連なるのだが、その仕舞は北西隅角と同様に長短の石材を交互に積み上げている。あるいはここが南西隅角を形成する可能性もあるが、現状を観察する限り、石材が東の地中へ潜り込んで続いていくかどうかは分からない。これが続く場合、短ければ単なる石垣仕舞の方法ととらえるべきであろうが、長く深い場合は池田期の上屋（天守が存在？）の構造にさらなる検討が必要となる。これについては今後の調査の進展にゆだねるしかない。

使用石材から見る限り、石垣は吉田城址内において古式の部類に属し、従来の指摘どおり池田輝政の吉田城拡張・改造時の遺構だろう。ただし、後述するようにこの石垣には縦方向を含む多数の目地が確認され、基本的には石垣の構築手順を表すと考えられるが、一方で、近世での度重なる崩壊と積み直しを想定する必要もある。

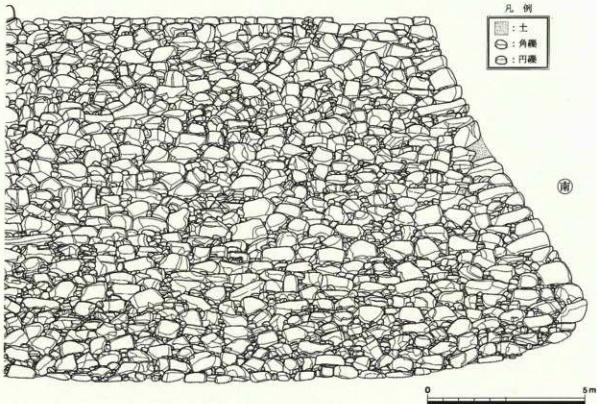
鉄槽台本丸内側石垣の解体工事（第30図）

鉄槽下石垣の内、復興櫓に直接する部分は昭和29年の建設工事に際して積み直されている。これは第29図でも示したように、石垣の北・西面で認められる明瞭な目地や積み方の違いからも明らかであ

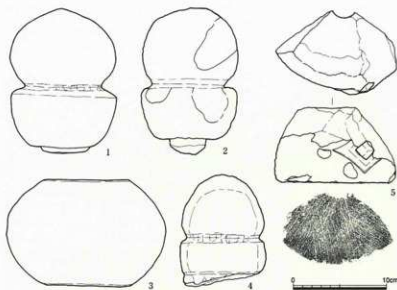




北面石垣



第29図 鉄槽下石垣実測図 (1 / 120)



第30図 檜台の裏込めに使われた石塔等 (1/4)

った。前述の理由で、この檜台の本丸内側に面した部分のみ積み直し工事を行った。

この築石は北・西面と同様にチャートを主体としており、本来あった池田期の石垣を再利用したものである。石垣を解体したところ、川原石を使用した裏込めが検出され、さらにその内側でコンクリート壁が現れた。従って、復興檜の建設時に石垣を積み直した際

に、裏込めの石材ももともと使用されていたものを再利用したと考えられる。

裏込めの中から少数ではあるが、石塔の部材や破片、さらに茶臼の破片が出土しており、石材の収集時に身近なものも利用したようである。

出土遺物を第30図に図示した。1～3は組合式五輪塔の部材である。1・2は空風輪、3は水輪で、いずれも花崗岩製（岡崎産）である。4は一石五輪塔の空風輪部分で、凝灰岩製（奥三河産）。5は茶臼の上部で、柄の取り付け穴が存在する。このうち4・5は石垣築造の直前段階である16世紀代のものである。

まとめ（第31図）

以上のように、鉄槽下石垣はその特徴から、従来の評価のとおり池田期の文祿・慶長年間に築かれたとするのが妥当である。吉田城址内において、地表面から同様の特徴を持った石垣を見いだすことはできないが、発掘調査によって二の丸西側の堀底で検出された石垣や、これに続く二の丸口北側の堀斜面で検出された石垣などは同様の特徴を持ち、池田期と推定される。また本丸内側でも、例えば東側一帯は積み方こそ異なるが、石材にはチャートや石灰岩を主に使用しており、池田期の石材を再利用して積み直した部分と考えられる。恐らく、現存する石垣は花崗岩で構成されるところも含め、池田期段階から存在した石垣の位置を踏襲して築かれたのではないだろうか。

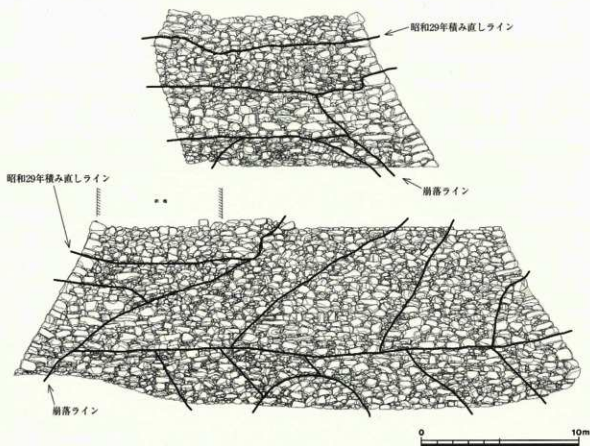
また、これもすでに指摘されていることだが、鉄槽下石垣は吉田城内で最も高い石垣、まさしく高石垣である。高石垣はその視覚的効果を意識して築かれたもので（加藤1996）、吉田城の西側を通っていた街道や豊川にかかる橋から最もよく見える場所に高石垣を築くことは、きわめて重要だっただろう。近世の浮世絵に描かれた「吉田宿」のモチーフは、おもに豊川にかかる橋と川沿いに建ち並ぶ檜であり、近世の認識からも、ここが視覚的に重要なポイントであったことが分かる。そしてより堅牢かつ入念に石垣を築き上げたために、今なお姿をとどめるのである。

一方で、測量図から観察される目地は、この石垣がけっして当初からの状態では無いことを物語る。ことに北西隅角を挟んで斜めに走る目地は、ここが滑落・崩落した後積み直されたことを推定させる。つまり、現状の北西隅角は当初の姿を留めるものではない。宝永4年(1707)と嘉永7年(1854)の大地震で受けた鉄槽の被害状況は、前者の時に戊亥の方向(北西)に傾いて大破し、後者の時には半壊したためついに取り壊されている。こうした記録からも、近世における複数回の積み直しが想定される。しかし、違和感を覚えない印象からも、積み方は前代の方法を忠実に踏襲したと思われ、近世の石垣修築のあり方を考える上で興味深い事例といえよう。

積み直しが想定されるとはいえ、鉄槽下石垣は織豊期吉田城の姿を偲ばせる数少ない遺構である。今後も豊橋市民の貴重な文化財として、保存につとめなければならない。

参考文献

- 加藤理文 1996 「『石垣』の構築と普及(静岡県内の事例から)」『織豊城郭』第3号
 加藤理文 2006 「吉田城の石垣構築とその変遷」『検証・吉田城』豊橋市教育委員会
 三浦正幸 2006 「今、よみがえる吉田城-その建物復元に向けて-」『検証・吉田城』豊橋市教育委員会



第31図 石垣の目地(1/240)

付載2 吉田城址金柑丸東側堀の立会調査

調査の経緯と経過

吉田城は豊川を背に本丸を置き、さらに川に沿って東に金柑丸が連なり、西・南・東を囲むようにして三の丸が存在する。それぞれの曲輪は堀と土塁によって区別されている。

ところで、金柑丸と三の丸の境界の堀は、その北東側に存在する豊橋市職員駐車場と市役所庁舎とを結ぶ通路として利用されてきた。堀の北側には階段が設置されているほか、東側にある三の丸会館への通路となる階段も斜面に設けられ、豊橋公園内でのイベント開催時にも多くの市民が利用している。堀が豊川側大きく開口するため、ここが通路として使用されるのは自然な成り行きであり、法面の崩落による土砂の流入や公園整備の過程で、徐々に堀が埋められてスロープ状になっていた。そして利用者の多さから、通路として整備を進めるべきとの意見が市役所内で出され、公園緑地課が担当となって盛り土と舗装を中心とする園路整備工事が行われた。このとき、地下に排水管を設置するため一部を溝掘りすることとなり、市教育委員会職員の立ち会のもとに工事を実施した。

すると、豊川に面する位置から石垣と土塁の痕跡が検出されたため、施工業者の協力もとに工事を中断し、遺構断面の清掃と図化作業を実施した。調査日は平成17年11月11～14日である。

遺構の状況（第32図）

石垣と土塁は、堀の北端を東西に塞ぐようにして存在していたようだが、後世の流入土によって完全に埋没していた。工事の掘削は、これを横断するように断ち割る形となった。ちなみに、掘削された部分だけを対象に調査したため、石垣や土塁の下端は確認していない。

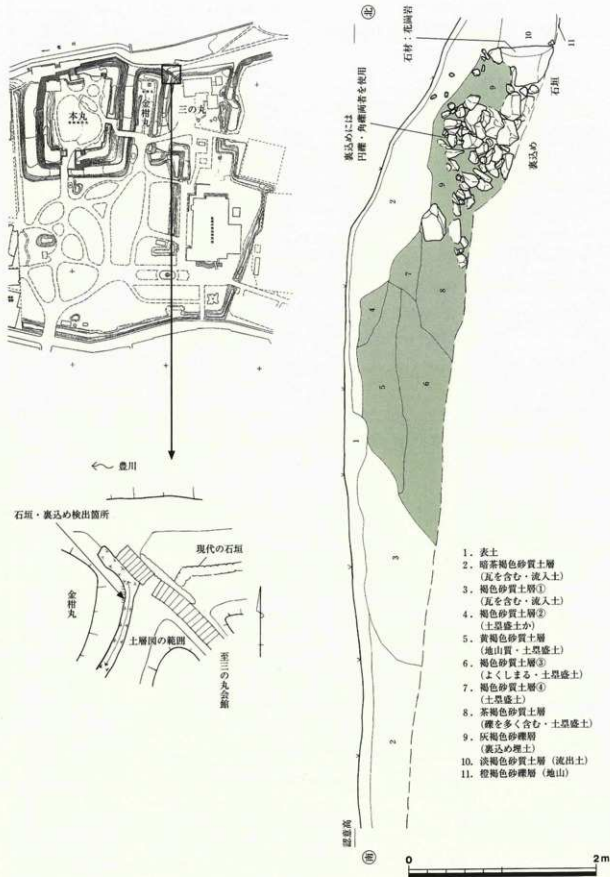
石垣の石材は1石しか検出されていない。石材には花崗岩を使用し、平坦な面を北側（豊川側）に向けている。石材の南側には裏込めが存在し、角礫や川原石である円礫が認められた。

土塁は石垣や裏込めを覆うようにしてあり、褐色系の砂質土が使用されている。よくしまり、土塁の構築時に叩き締めたものと思われる。土塁の埋土の背後（南側）には瓦片を含む暗茶褐色や褐色の砂質土が堆積しているが、これは後世に堆積した流入土である。

まとめ

近世に描かれた吉田城絵図によれば、この堀が豊川に向けて開口するように表現されたものがある反面、17世紀中葉の作と考えられる「三州吉田城図」や幕末の「吉田藩土屋敷図」のように、城の構造を詳細に記した絵図には土塁と石垣、あるいは土橋状の遺構が表現されており、長期にわたり地表面に露出していた遺構だった。しかし、廃城後ほどなく埋没したと思われる。本丸の堀が本来水堀では無かったことを考えると、あるいは豊川からの川水の流入をあえて避けるための防塁だったとも思われる。またここが通路のように表現されたものや、上に櫓が通るように表現された絵図も存在する。

さまざまな用途が想定される遺構だが、いずれにせよ絵図を参考に、こうした未知の吉田城遺構を把握し、今後も調査・保存に務めるべきであろう。



第32図 金柑丸・三の丸間堀底土層縦断面図 (1/40)

付載3 南田遺跡発掘調査

調査の経緯と経過

南田遺跡は、豊橋市下五井町字南田に所在する。過去に豊橋市下五井地区体育館建設に際して発掘調査が行われ、10世紀後半の井戸が検出された。井戸は底に曲物が置かれ、さらに板材を井戸枠にしており、内部から灰軸陶器とともに齋串が1点出土している。このほか、客土から古墳時代中期の土師器がまとめて出土しており、沖積地の集落の様相をうかがい知る貴重な事例となった（豊橋市教育委員会1996）。

今回実施した2次調査は、吉田城址23次調査と同じく豊橋市役所消防本部防災対策課が、下五井地区体育館の敷地内に「飲料水兼用耐震性貯水槽」を建設するために行ったものである。調査区は、貯水槽の設置部分にあたる円形部分のみを対象とし、調査面積は75㎡である。

調査は平成17年7月1日～13日にかけて実施した。対象地は体育館の駐車場として常時使用される場所のため、1次調査の成果をもとに遺構面を想定し、重機で掘削を行った。遺構として掘立柱建物跡1棟を検出したが、そのほかはまったく認められず、また遺物も固化成可能なものはほとんど存在しなかった。

完掘後、重機を使用してさらに断ち割りを行ったが、明確な遺構面は検出されず、遺物も出土しなかったため、高所作業車を用いて写真撮影を行い、調査を終了した。



第33図 南田遺跡調査区位置図（1/2,500）

基本層序と検出された遺構（第34図）

調査区は沖積地の自然堤防上となる微高地にあり、複数の層が水平に堆積していた。造成土の下には表土の黒灰色砂質土層があり、検出された標高や土質の特徴から、その下に存在する暗灰褐色粘質土層が1次調査での遺構検出層と考えられた。ここを精査したところ、調査区の南端で掘立柱建物跡1棟が検出された。

検出された掘立柱建物・SB-1は、不整形な柱穴5カ所からなり、沖積地にあるためか一部に柱材が遺存していた。柱穴の規模は平面が0.35m～0.75m程度、深さは0.4～0.5m程度である。柱穴の間隔は不均等で、西辺は3カ所、東辺は2カ所の柱穴が並ぶ。出土遺物はまったく無いが、このような特徴から建物の時期は中世以降ではないかと考えられる。

また、調査区の東半には暗灰色粘質土が広く分布していたため、これを除去したところ緩やかに東へと下がる地形になった。自然堤防の端付近の落ち込みか、何らかの遺構なのかは明らかにできなかった。完掘後、さらに下層の遺構を確認するため重機で断ち割りを行った。しかし遺構はまったく確認されず、遺物も出土しなかった。

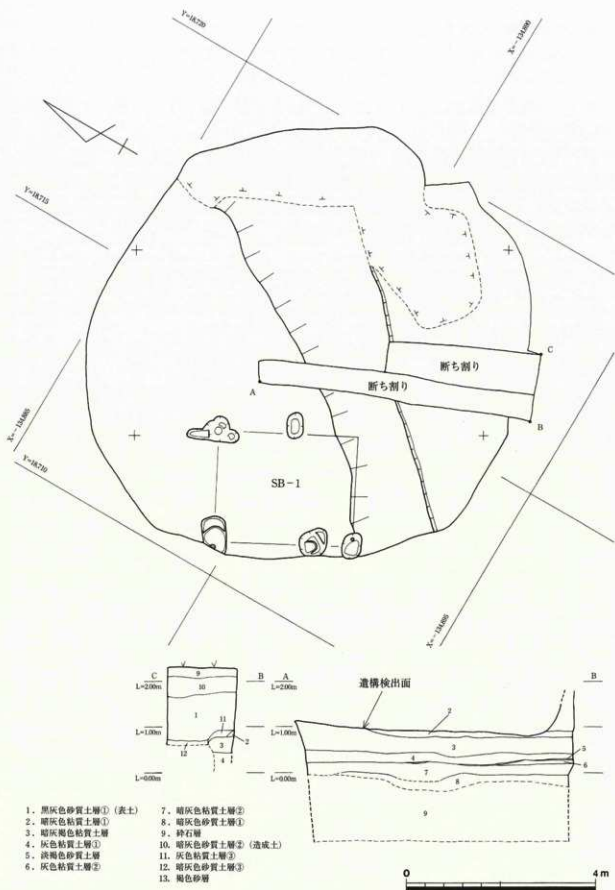
今回の調査ではまったくと言って良いほど遺物は出土しなかったが、表土の掘削中に弥生時代中期の凹線文系土器の破片が1点だけ出土している。あまりに小片のため図化はしていない。

まとめ

今回の調査では、掘立柱建物以外に顕著な遺構は確認されず、また遺物も無かった。従って、この付近は遺跡の縁辺部に相当すると思われる。その中で、表土出土とはいえ、弥生時代中期の土器が確認されたのは注意される。東三河地域を代表する弥生時代中期の集落・瓜郷遺跡は、南田遺跡から東へ450mの位置にあり、弥生土器片が客土とともに南田遺跡へ搬入された可能性は否定できないが、こうした沖積地に立地する弥生集落の遺構が今後周辺部から発見される可能性がある。

参考文献

豊橋市教育委員会 1996 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第31集 南田遺跡・瓜郷遺跡（Ⅲ）」

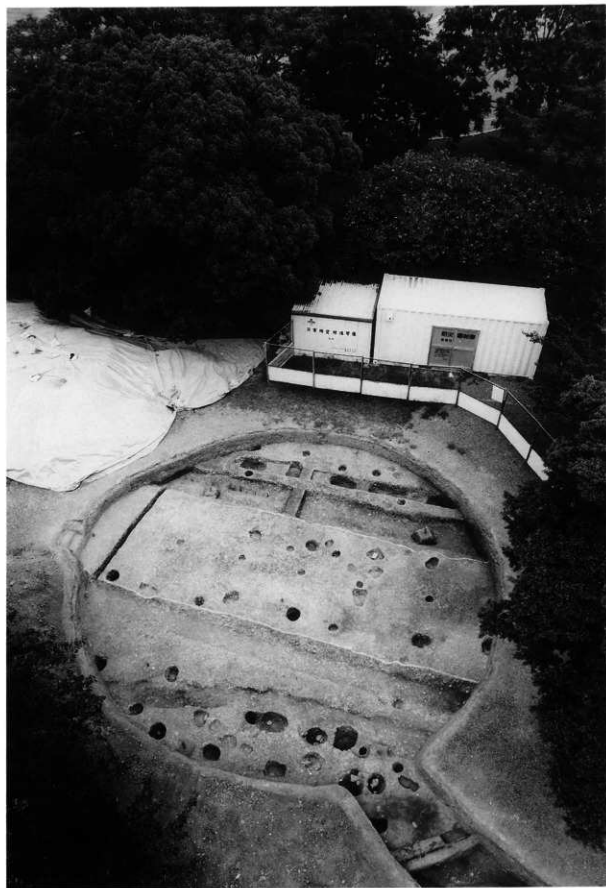


- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. 黒灰色砂質土層① (表土) | 7. 暗灰色粘質土層② |
| 2. 暗灰色粘質土層① | 8. 暗灰色砂質土層① |
| 3. 暗灰色粘質土層 | 9. 砂石層 |
| 4. 灰色粘質土層① | 10. 暗灰色砂質土層② (造成土) |
| 5. 淡褐色砂質土層 | 11. 灰色粘質土層② |
| 6. 灰色粘質土層② | 12. 暗灰色砂質土層③ |
| | 13. 褐色砂層 |

第34図 調査区平面図・土層図 (1/80)

写真図版





調査区北半全景(西から)



1. 道路遺構(北から)



2. 道路遺構の舗装状態(南から)



1.1区SD-1 [道路遺構] (南から)



2.4区SD-1 出土状況-1 (北東から)



1. 調査区全景(南から)



2. 調査区南半全景(北から)



3. 5区SD-1(南から)



4. 4区SD-1出土状況-2(東から)



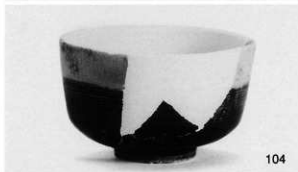
5. 4区SK-11出土状況(南東から)



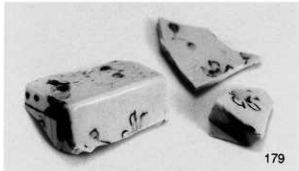
6. 柱根出土状況(南から)













1. 本丸・二の丸の現状-1(北から)



2. 本丸・二の丸の現状-2(北東から)



1. 鉄櫓下石垣全景-1(北から)



2. 鉄櫓下石垣全景-2(西から)



1. 北面石垣出隅部上半(北から)



2. 北面石垣出隅部下半(北から)



3. 北面石垣と武具庫下石垣(北から)



4. 西面石垣出隅部(西から)



5. 西面石垣中央(西から)



6. 西面石垣南端(西から)



調査区全景(北西から)



1. SB-1 (北西から)



2. 断ち割り状況(北西から)

報告書抄録

ふりがな	よしだじょうし(8)							
書名	吉田城址(Ⅷ)							
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第87集							
編著者名	岩原 剛							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440-0801 愛知県豊橋市今橋町3番地の1 TEL0532-51-2879							
発行年	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしだじょうし 吉田城址	とよはしし 豊橋市 いほしちょう 今橋町	23201	79393	34度 45分 54秒	137度 24分 5秒	20050725 ～20050831	282㎡	飲料水兼用 耐震性貯水 槽設置工事
よしだじょうし 吉田城址	とよはしし 豊橋市 いほしちょう 今橋町	23201	79393	34度 46分 3秒	137度 23分 45秒	200508		公園整備 (石垣補強)
よしだじょうし 吉田城址	とよはしし 豊橋市 いほしちょう 今橋町	23201	79393	34度 46分 3秒	137度 23分 48秒	20051101 ～20051114		公園整備 (園路整備)
あのみだいせき 南田遺跡	とよはしし 豊橋市 しもごいちちょう 下五井町 あのみだ 字南田	23201	79359	34度 46分 51秒	137度 22分 26秒	20050701 ～20050713	75㎡	飲料水兼用 耐震性貯水 槽設置工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吉田城址	城館跡	古代 中世 近世	土城、柱穴 柱穴 道路遺構、塀、溝、 土城、石垣	須恵器、灰釉陶器 山茶碗、陶器、土師器 近世陶磁器、土師器、 土製品、石器		近世の武家屋敷地 を調査。道路遺構 は絵図に表れる八 幡小路跡		
南田遺跡	集落遺跡	中世～近世	掘立柱建物					

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第87集

吉田城址(Ⅷ)

2006年3月31日

発行 豊橋市教育委員会©
美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3-1

印刷 共和印刷株式会社